



鳥取県米子市

INDA MIYA NO TANI

陰田宮の谷遺跡 4区・5区

2000.3

財団法人 米子市教育文化事業団

序

鳥取県西部に位置する米子市は、北を日本海に臨み、西に大山を控える自然環境に恵まれた地域であります。また、古代遺跡の宝庫で、歴史的にも恵まれています。特に近年では、急増する開発に伴う発掘調査によって古代の様子が徐々に明らかになってきました。

当財団では、これまで一般国道180号道路改良工事に伴い平成4年度から陰田遺跡群の発掘調査を行ってまいりました。本報告書は、この工事最終区間の調査報告書となります。今回の調査では、飛鳥・奈良時代の遺構、遺物を多数検出し、陰田遺跡群の性格を考える上で貴重な資料を得ることができました。

これらの資料が今後の調査研究および教育のために広く活用され、さらに、広く一般の方々に埋蔵文化財に関する理解、関心を深める一助となれば幸いに思います。

最後になりましたが、調査に際しましては多大なご理解とご協力を頂きました地元の方々をはじめ、ご指導、ご支援を賜りました調査従事者並びに関係各位に対して厚くお礼を申し上げます。

平成12年3月

財団法人 米子市教育文化事業団

理事長 森 田 隆 朝

例　　言

1. 本書は「一般国道180号道路改良工事」に伴い、平成10年度より2カ年に渡って鳥取県米子市陰田宮の谷地内で実施した、埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査は、鳥取県からの委託を受け、財団法人米子市教育文化事業団が実施した。
3. 調査は、財団法人米子市教育文化事業団、主任平木裕子、調査員佐伯純也が担当した。
4. 本書に用いた方位は座標北を示し、座標値は国土座標第V系を用いた。
5. 自然科学分析については、鉄滓の蛍光X線分析を(株)古環境研究所に委託した。
6. 出土鉄製品の保存処理については、(財)元興寺文化財研究所保存科学センターに委託した。
7. 遺物の番号は本文、図、表、写真とも対応している。
8. 本書は、佐伯が執筆、編集した。
9. 陰田出土須恵器の胎土分析について、奈良教育大学教授三辻利一氏より玉稿を賜りました。記して感謝いたします。
10. 現地調査及び報告書の作成にあたっては下記の方々にご教示を頂いた。記して感謝いたします。
(敬称略)

国田俊雄　辻　信広　西尾克己　濱田竜彦　東森　晋　堀口　謙　三辻利一　山内紀嗣

目　　次

例　　言

第1章 発掘調査の経緯

第1節　調査に至る経緯	1
第2節　調査の経過	1
第3節　調査の組織	1

第2章 遺跡の位置と環境

第1節　陰田宮の谷遺跡の位置	2
第2節　陰田宮の谷遺跡の歴史的環境	2

第3章 宮の谷4区の調査

第1節　調査の経過と方法	5
第2節　1トレンチの調査	5
第3節　2トレンチの調査	7

第4章 宮の谷5区の調査

第1節　調査の経過と方法	8
第2節　1トレンチの調査	10

第3節	2 ドレンチの調査	10
第4節	3 ドレンチの調査	10
第5節	4 ドレンチの調査	11
第6節	5 ドレンチの調査	11
第7節	遺構外出土遺物	16

第5章 まとめ

第1節	遺構について	30
第2節	遺物について	30
第3節	遺跡について	30
第4節	結語	31

第6章 自然科学分析

第1節	陰田遺跡群出土須恵器の胎土分析（三辻利一）	32
第2節	陰田宮の谷遺跡における蛍光X線分析（古環境研究所）	37

宮の谷遺跡出土遺物観察表.....39

写真図版

報告書抄録

第1章 発掘調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

調査は、鳥取県によって進められている一般国道180号道路改良工事に伴う、米子市陰田宮の谷地内に所在する埋蔵文化財の記録保存を目的としたものである。鳥取県より工事予定地内における遺跡の有無について、照会を受けた米子市教育委員会は、事前の試掘調査を実施し、地内における埋蔵文化財の存在を確認した。これを受け、鳥取県は米子市教育委員会と協議し、発掘調査を財団法人米子市教育文化事業団に委託した。これにより米子市教育文化事業団埋蔵文化財調査室が調査を実施することとなった。

発掘調査は、宮の谷遺跡4区・5区を対象とし、工事との調整のため2ヶ年に分けて実施した。

第2節 調査の経過

発掘調査は、工事との調整で未調査のままだった地点を対象とした。平成10年度は、11月から12月まで、宮の谷4区と5区の一部を調査した。平成11年度は、4月から6月まで宮の谷5区の調査と年度末までに報告書の作成を行った。

第3節 調査の組織

発掘調査は下記の体制で行われた

調査主体 財団法人米子市教育文化事業団

理事長 森田隆朝（米子市長）

常務理事 山岡 宏（米子市教育長）

事務局長 渡辺勝文（平成11年6月まで）

清間 勉（平成11年7月から）

埋蔵文化財調査室

室長 森田慎二（米子市教育委員会文化課課長）

次長 深田政幸

調査担当 主任 平木裕子

調査員 佐伯純也

臨時職員 森田静香

調査協力 米子市教育委員会

第2章 遺跡の位置と歴史的環境

第1節 位置と環境

陰田宮の谷遺跡は、鳥取県米子市陰田町に所在する、集落遺跡である。米子市は、鳥取県の西部日本海側に位置する、人口約13万人、面積約100平方キロメートルの都市である。

米子市の地形は、市の東部を流れる日野川によって堆積した米子平野、弓ヶ浜半島、砂浜海岸地帯と大山山麓の丘陵地、中国山地から伸びる山塊によって構成されている。陰田町は米子市の西部、島根県安来市との県境に位置し、近世には出雲街道が通り、口陰田地区には番所が置かれていた。地形は、北側が中海に面し、三方は標高70~160mの山稜に囲まれている。現在の陰田集落は、中海に面した「口陰田」と南側の「奥陰田」の二地域に区分される。

第2節 歴史的環境

陰田遺跡群では、これまでの調査で多くの遺跡が調査され、各時代における集落の動向が明らかにされつつある。ここでは、陰田遺跡群における歴史的環境について述べる。

旧石器・繩文時代 陰田遺跡群ではこれまでのところ旧石器、繩文時代の遺構は、落とし穴とされる土坑が数例確認されている程度で、まとまった集落の検出例はない。遺物については、宮の谷遺跡3区の調査で有舌尖頭器が出土している。そのほか土器は、陰田第9遺跡から前期の土器が、陰田第1遺跡から後期の土器が出土している。いずれも低地部での検出例が多い。

弥生時代 弥生時代には中期中葉から陰田第1遺跡、陰田第6遺跡などで住居跡が検出されている。丘陵の端部をカットしたテラス状の平坦面に作られており、このころから山地への集落の移動がみられる。また墳墓の検出例がなく、墓制の実態については不明である。

古墳時代 集落の住居は、前代と同様の形態をとる。また丘陵の尾根部に古墳が営まれるようになる。さらに6世紀後半からは横穴墓が作られ、後背墳丘を意図したものもみられる。陰田遺跡群での横穴墓の造営は、7世紀後半に終焉する。

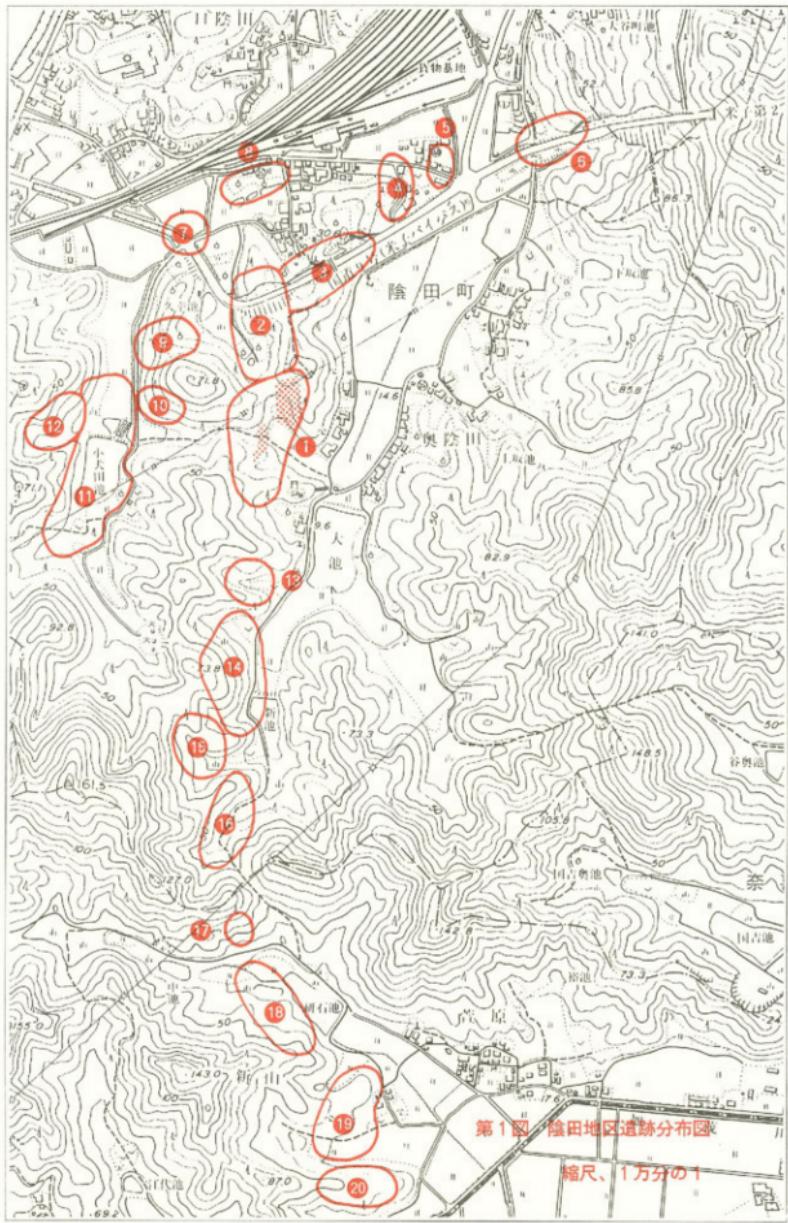
飛鳥・奈良時代 広畠遺跡、下山遺跡など陰田遺跡群の最盛期に当たる。遺構は、山の斜面をカットして出来た平坦面に、掘立柱建物などを構築したものが広範にみられる一方で、鐵冶に関連する遺構や遺物の出土も目立つ。また陰田第6遺跡では、石敷道路が検出され、古代の交通路の存在が明らかとなっている。

平安時代・中世 平安時代から中世全般にかけては陰田遺跡群内では顕著な遺構の分布が認められない。周辺の遺跡としては、目久美遺跡、尾高城跡、米子城跡などがあり、陶磁器、石鍋などが出土している。

近世 江戸時代の遺跡としては、陰田古墓群の調査が行われ、陶磁器や人骨、墓石などの調査が行われた。

陰田地区遺跡名一覧表（番号は第1図と一致する。）

1	陰田宮の谷遺跡	2	陰田第6遺跡	3	陰田横穴墓群	4	陰田第4遺跡
5	陰田第3遺跡	6	陰田第1遺跡	7	陰田第7遺跡	8	口陰田遺跡
9	マノカン山遺跡	10	ヒジリザコ遺跡	11	陰田小犬田遺跡	12	荒神谷遺跡
13	広畠遺跡	14	隠れが谷遺跡	15	ハタケ谷遺跡	16	陰田夜坂谷遺跡
17	陰田下山遺跡	18	砥石山遺跡	19	新山・山田遺跡	20	山田古墳群



第1図 陰田地区遺跡分布図

縮尺、1万分の1



第3章 陰田宮の谷遺跡4区の調査

第1節 調査の経過と方法

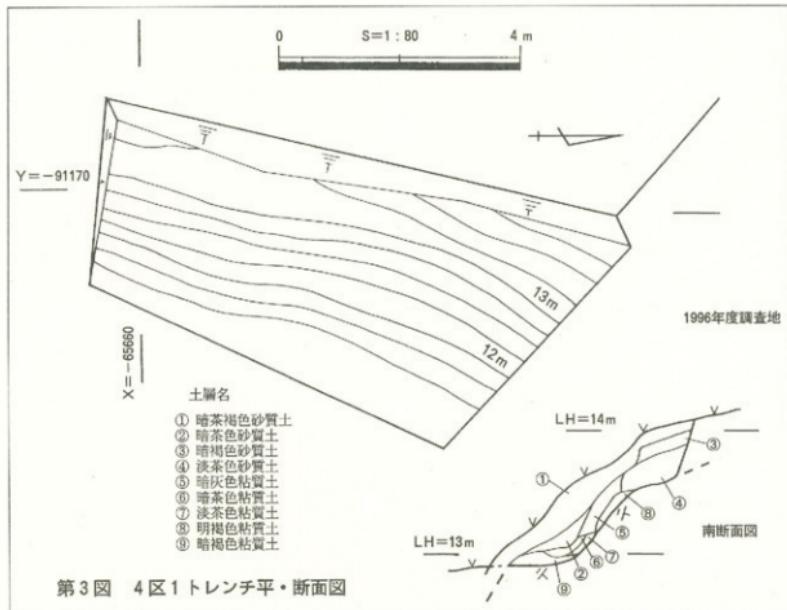
4区は平成8年度の調査区の南東端に位置する。1トレンチは平成10年11月より着工し、28m³を調査した。2トレンチは平成10年12月より着工し、250m³を調査した。2つの調査区は、どちらも重機にて表土を除去した後に、人力で遺構検出作業を行った。また2トレンチでは湧水があったため水中ポンプを使用した。

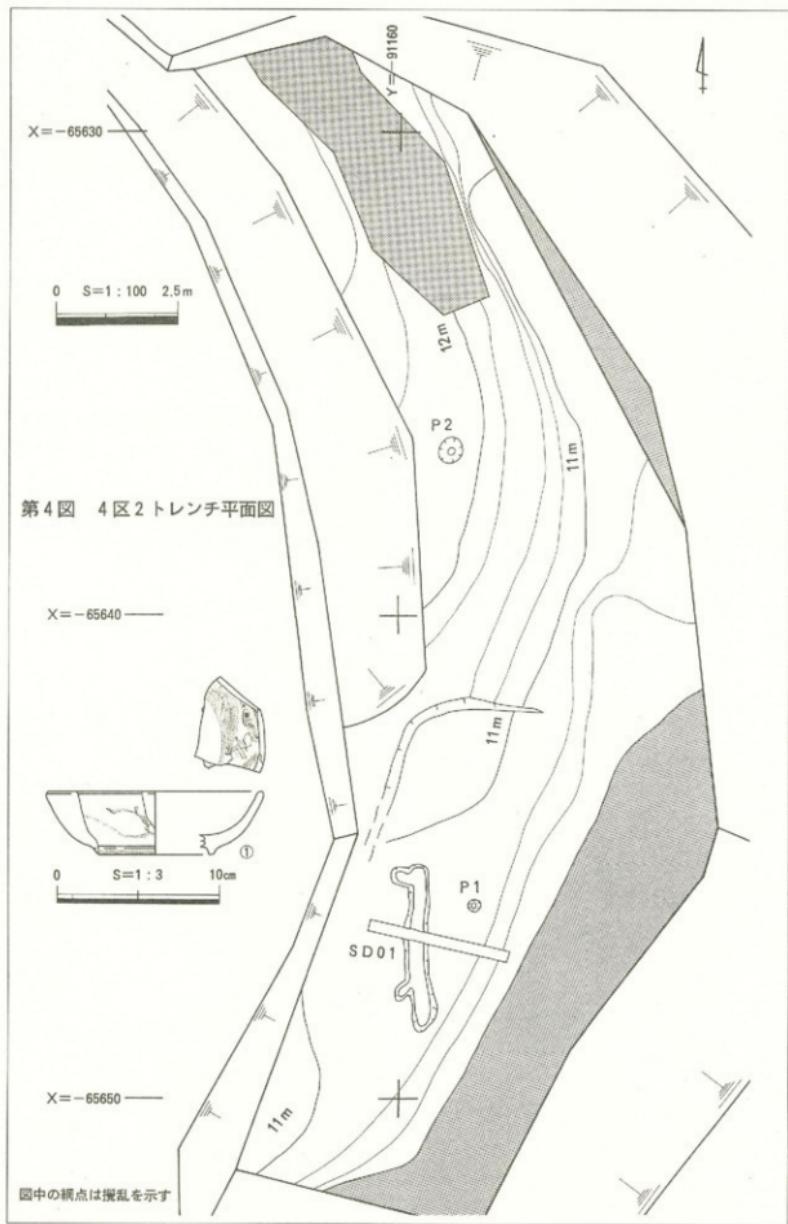
第2節 1トレンチの調査

1トレンチは平成8年度調査地点の南東部に位置する。調査地の現状は斜面であり、トレンチの西隣には、テラス状の平坦地がみられ、住居跡などの遺構の存在が推定された。トレンチの規模は、長辺8メートル×短辺3.5メートルに設定し、重機にて表土を掘削した後、人力で掘り下げを行った。

検出遺構 深さ1メートルほど堆積した土砂を除去し、地山である赤褐色粘土層の上面まで掘り下げ、遺構検出を試みたが遺構は全く検出されなかった。

出土遺物 表土掘削中にトレンチの西側に位置する平坦地からの転落遺物と思われる磁器の碗や須恵器片を検出した。いずれも細片のため図化することができなかった。





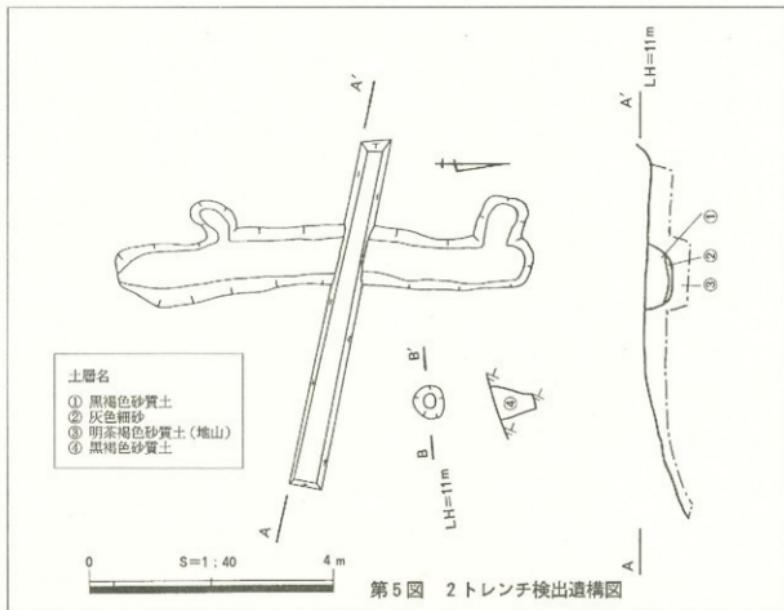
第4図 4区2トレンチ平面図

第3節 2トレンチの調査

2トレンチは平成8年度調査地点の東側に位置する。現地は、道路工事前までは、農業用のため池が存在し、潤沢な環境であった。トレンチは、ややいびつな三日月形を呈する。深さは地表面から3mまでを調査し、地山である明黄褐色砂質土上面において遺構検出を行った。調査の結果、遺構面の大半は擾乱されていたが、一部に残る平坦面から、遺構検出を行った。

検出遺構 遺構面の大半は、事前に作られた暗渠によって破壊されており、十分な検出作業が出来ない状態であった。また湧水が激しかったため、水中ポンプによって排水しながら調査を行った。調査の結果、遺構は地山面でピット2基と溝状遺構を検出した。ピット1は、直径30cm、深さ35cm。ピット2は、直径30cm、深さ25cmを計る。SD01は、トレンチ南部のやや平坦な地点に位置する。全長340cm、幅50cm、深さ25cmで、断面は「U」字形を呈する。これらの遺構内からは、遺物が出土せず、時期、性格ともに不明である。

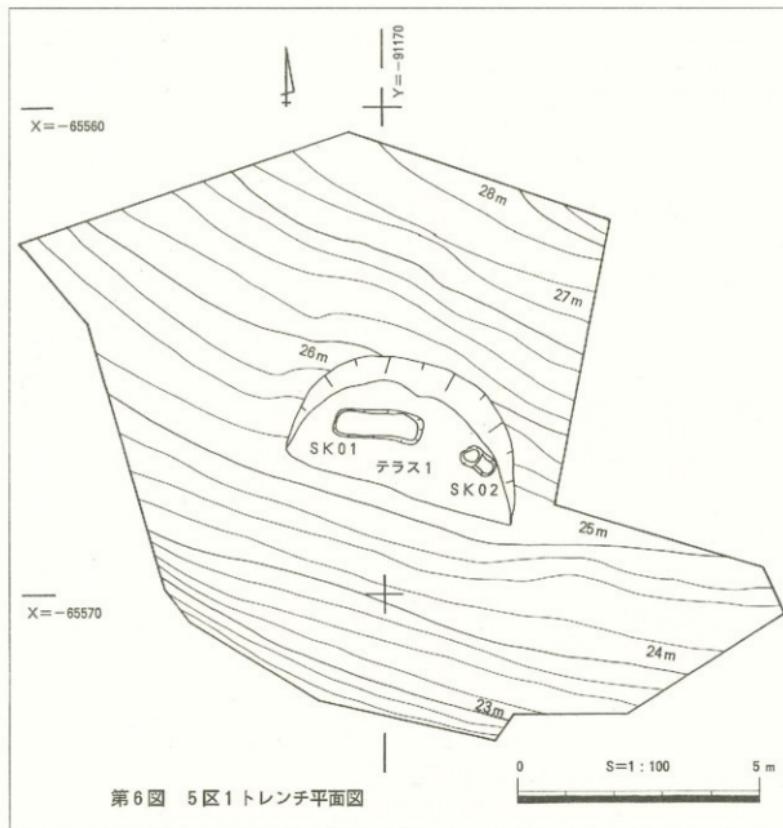
出土遺物 表土、埋土の掘削中に須恵器、土器を検出したが、いずれも細片であり図化することができなかった。第4図の土器1は、表土掘削中に出土した肥前系の磁器皿である。外面に唐草紋、内面に意匠不明の紋様を描く。



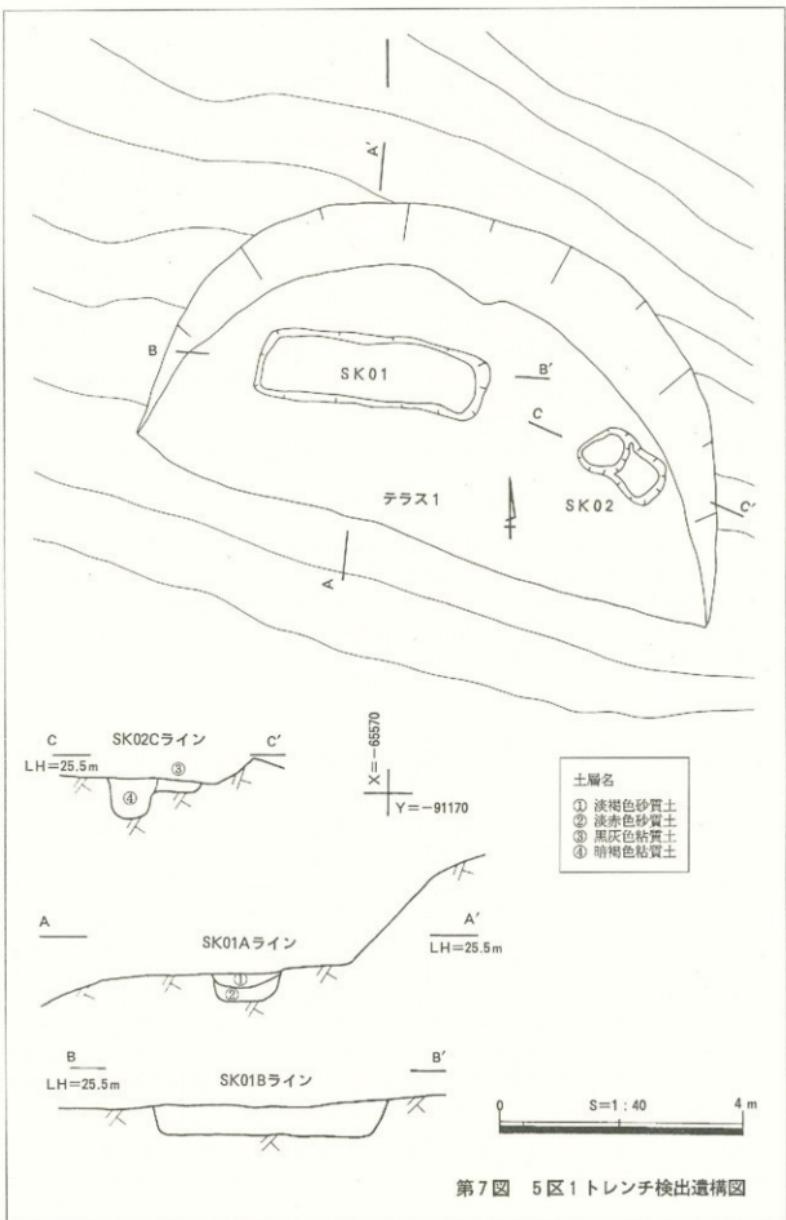
第4章 陰田宮の谷遺跡5区の調査

第1節 調査の経過と方法

五区は、宮の谷4区の谷を隔てた東側に位置し、北の山を越えた所には陰田第6遺跡が所在する。調査地の地形は、二つの小高い山に囲まれた谷地形になっており、5トレンチにかけてはやや平坦な地形を成している。調査地の現況は、近年まで竹林として利用されており、現地には多くの竹根が残されていた。また東側の尾根部には小規模な墓地も所在している。調査トレンチは5区設定したが、3、4、5トレンチは最終的に一つの調査区として接続している。現地調査は、平成10年度に1～4トレンチを、平成11年度には、5トレンチを調査した。作業は重機、人力にて表土の除去を行い、人力にて遺構検出作業を行った。また排出された土砂については、重機、及びダンプを用いて場外にて処分した。



第6図 5区1トレンチ平面図



第7図 5区1 トレンチ検出遺構図

第2節 1 トレンチの調査

1 トレンチは、標高約30mの尾根から南に下る斜面に位置する。山を隔てた北側には陰田第6遺跡が所在する。トレンチの面積は100m²を調査した。調査トレンチの比高差は6mあり、かなり急峻な斜面に位置する。また一部、教育委員会が実施した試掘トレンチと重複している。調査は、現地が斜面のため重機が使えず、すべて人力にて表土を掘削した。トレンチの堆積土は、表土から地山まで10~30cmほどあり、ほぼ淡黄褐色砂質土の1層のみであった。

検出遺構（第6図） 人力にて表土を掘削したところ、トレンチ中央部でテラス状の落ち込みを確認したため、この地点を精査したところ、2基の土坑を検出した（第7図）。テラス状遺構は、幅5m、奥行き3mで、半円形にカットされて作られている。SK 01は、全長190cm、幅60cmで深さは20cmを計る。内部は、上層に淡褐色砂質土、下層に淡赤褐色砂質土が堆積していた。遺構に伴う遺物の出土がなく時期、性格ともに不明であるが、形態から土壙墓の可能性が考えられる。SK 02は深さ30cmのピット状遺構である。土層断面から、暗褐色粘質土が黒灰色粘質土を掘り込んで作られているが、遺物の出土がなく、時期、性格ともに不明である。

出土遺物 表土掘削中に、須恵器壺の体部片が出土したが、細片のため図化できなかった。

第3節 2 トレンチの調査

現地は、土取によって掘られた窪地の背後に位置する平坦地である。現地において平坦な地形が認められ、何らかの遺構の存在が推定されたため調査を行った。トレンチは、長さ3m×幅3mで、深さ30cmで地山に到達した。埋土は明黄褐色砂質土の一層のみで、遺構、遺物は全く認められなかつた。また遺物が出土しなかつたため、平坦地の造成時期については不明であるが、戦後に行われた竹林の開墾によって作られたものと考えられる。

第4節 3 トレンチの調査

1 トレンチの南側に位置する。トレンチは10m×25mに設定し、重機および人力にて調査を行った。

検出遺構 道路状遺構1条、溝状遺構2条、ピット29基を検出した。道路状遺構は、幅1m、検出長13m、深さ10cm程度の浅い掘り込みで、北側の陰田第6遺跡から続く切り通しから伸び、さらに南東へと続いている。また西側の宮の谷遺跡4区、平成9年度の調査で検出された道路状遺構と接続するものと見られる。時期は、トタン製の波板が地山直上から出土していることから、現代まで利用されていた道と考えられる。溝状遺構SD 01は、トレンチの北西部から南東方向に伸びる。検出長7m、幅80cm、深さ30cmを計る。道路の側溝の可能性が考えられる。遺構内からは、須恵器高环脚部片（第10図-2）が出土した。SD 02は、トレンチ南部で検出した。検出長3m、幅1m、深さ20cmを計る。調査区の最も低い地点に位置することから、自然に形成された流路であろう。遺物は、須恵器片が出土しているが、細片のため図化できなかった。ピットは、29基検出した。複数のピット内から、土器の細片が少量出土しているが、全て細片であり、時期を特定できるものはなかった。また建物の柱穴としてまとまるものもなく、性格は不明である。

出土遺物 第9図-土器2は、SD 01から出土した、須恵器高环脚端部である。脚部径13.4cmで、回転ナデ調整の痕跡を残す。

第5節 4 トレンチの調査

5 トレンチの北斜面に位置する。トレンチの東側は、土取によって掘られた窪地に接している。トレンチは、6 m × 7 mに設定し、主に人力で調査を行った。トレンチの土層は、表土である黒色砂質土一層のみで、全体的に30cmほど掘り下げる、すぐに淡赤黄褐色土の地山となる。遺構は、トレンチ中央部でテラス状の遺構を検出したが、遺物は全く出土しなかった。テラス状遺構は、奥行きが約1m、検出幅が5.4mで、斜面をカットして作られている。テラス状遺構の築造時期や用途は不明であるが、戦後行われた竹林の開墾によって作られたものと考えられる。

第6節 5 トレンチの調査

現地は、北に所在する尾根から緩やかに下る斜面である。ここは戦後行われた竹林の造成によって、深さ1mを越える土砂の堆積があり、これを重機で除去した後、人力で遺構検出を行った。遺構面は、盛土を除去した後に現れた黒色土面（第一遺構面）と、その下層の赤褐色砂質土面（第二遺構面）の2面である。

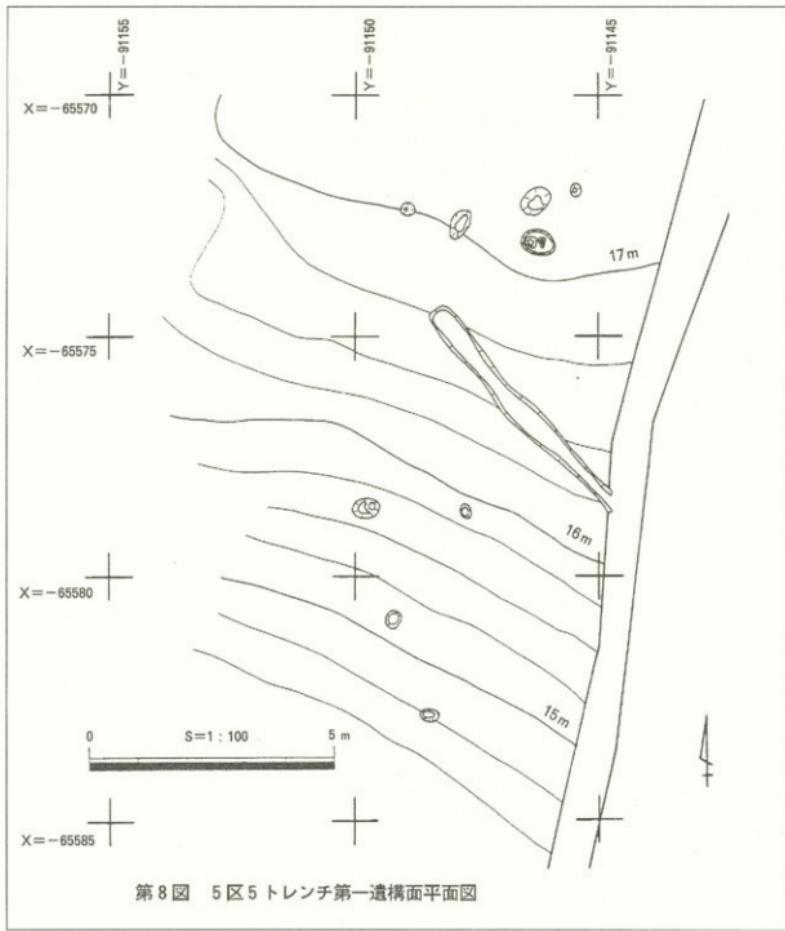
第一遺構面 表土を除去すると、トレンチ東部において、黒色の粘質土が面的に堆積していた。このため、この面で精査し、遺構を検出した。

検出遺構 溝状遺構1条、ピット9基を検出した。時期については、奈良時代から近世までの遺物が層位を同じくして出土しており、また多くが細片であった。このようなことから、第一遺構面で検出したこれらの遺構は、近世以降に作られたものと考えられる。

第二遺構面 第二遺構面は第一遺構面の黒色土を除去した赤褐色砂質土面で検出した。住居跡2棟、溝状遺構2条、ピット104基、土器溜り1か所を検出した。

検出遺構 トレンチの北端の斜面部から住居跡2棟、SI 01とSI 02を検出した。SI 01は検出長5mで、奥行きは約1mが残存していた。この建物に伴う柱穴は2基検出した。住居跡内の埋土は事前の試掘調査によって床面の直上まで擾乱されていたが、須恵器、土師器片が出土した。SI 01の北斜面寄りには断面「U」字形の周溝が穿たれ、埋土から鉄刀状鉄器（第10図、F 1）1点とほぼ同じ地点から須恵器环身（第10図、土器3）1点を検出した。そのほか床土中から須恵器环蓋を2枚合わせた容器に小鉄滓を埋納した遺構を検出した。これは土層からは、埋納時の掘り方が見られないため、床土を敷く際に地鎮を行ったものと考えられる。SI 02は、SI 01の下層において検出した。大部分が流出しているため、顯著な遺構は見られないが、平坦な面をなすことから、SI 01に先行する住居の可能性を考えた。二棟の住居の時期は、切り合いと出土遺物から、SI 01が7世紀後半に、SI 02がそれ以前に造られたものと考えられる。溝状遺構は、2条検出した。SD 501は、トレンチ中央部を東西に横断する溝で、西側を検出することができなかったが、3トレンチで検出したSD 01に接続するものと考えられる。検出長5m、幅80cm、深さ50cmを計る。溝内からは須恵器环身（第11図、土器8）、高环（第11図、土器7）が出土した。SD 502は、トレンチの谷状に窪んだ地点に位置する。長さ3m、幅1m、深さ30cmを計る。遺構内からは、遺物は出土しなかつたため時期、性格とも不明である。ピットは、黒色土上面で9基。地山面で104基検出した。掘立柱建物の柱穴としてまとまるものはない。また遺物が出土したピットは、P81から須恵器甕口縁部片（第11図、土器12）が出土している。

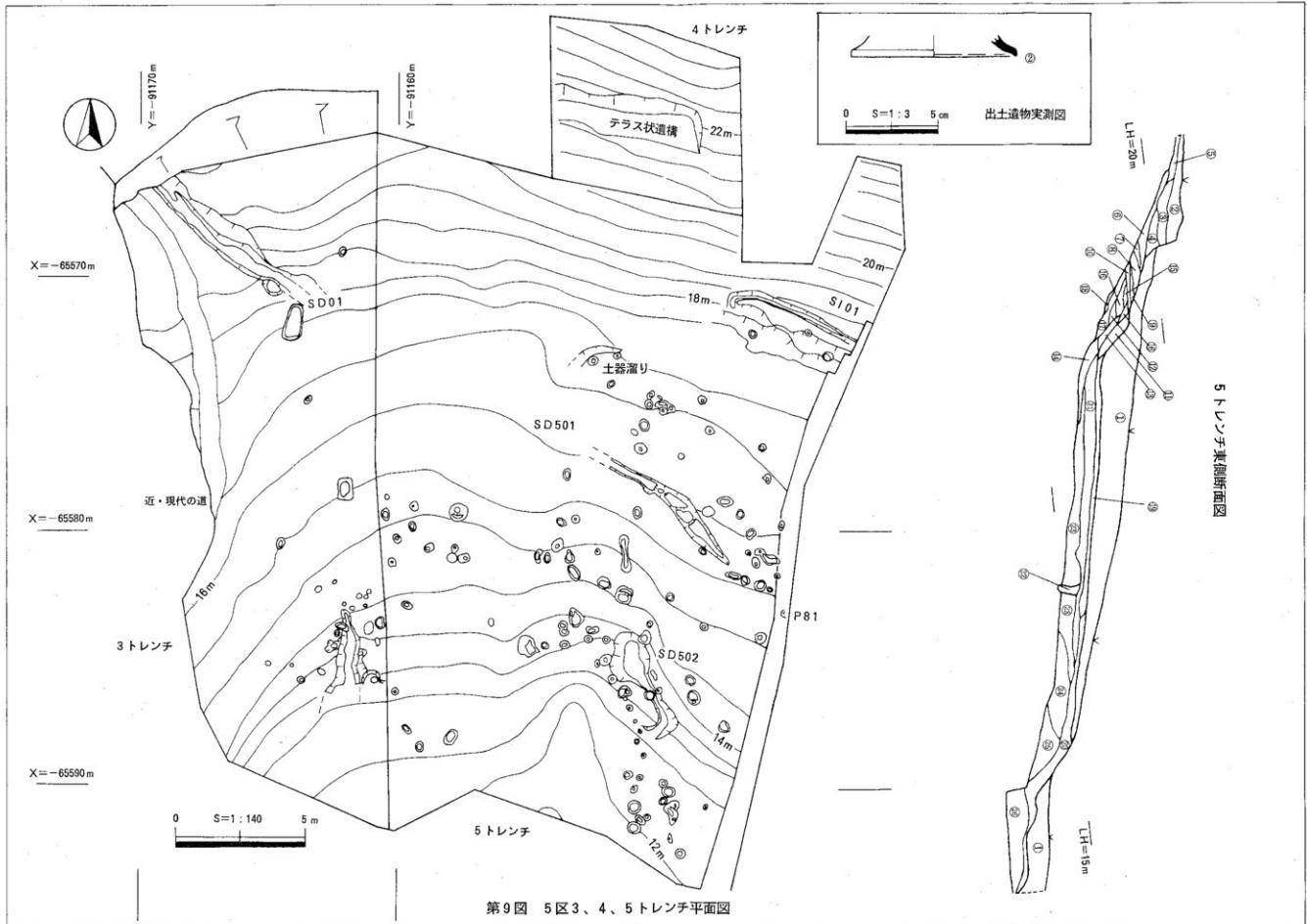
土器溜り SD 501の北側に所在する。淡黄褐色の砂質土に埋もれた状態で、須恵器环身、环蓋が出土した。（第11図、土器11）は环蓋で、外面に3つの竹管を施す。



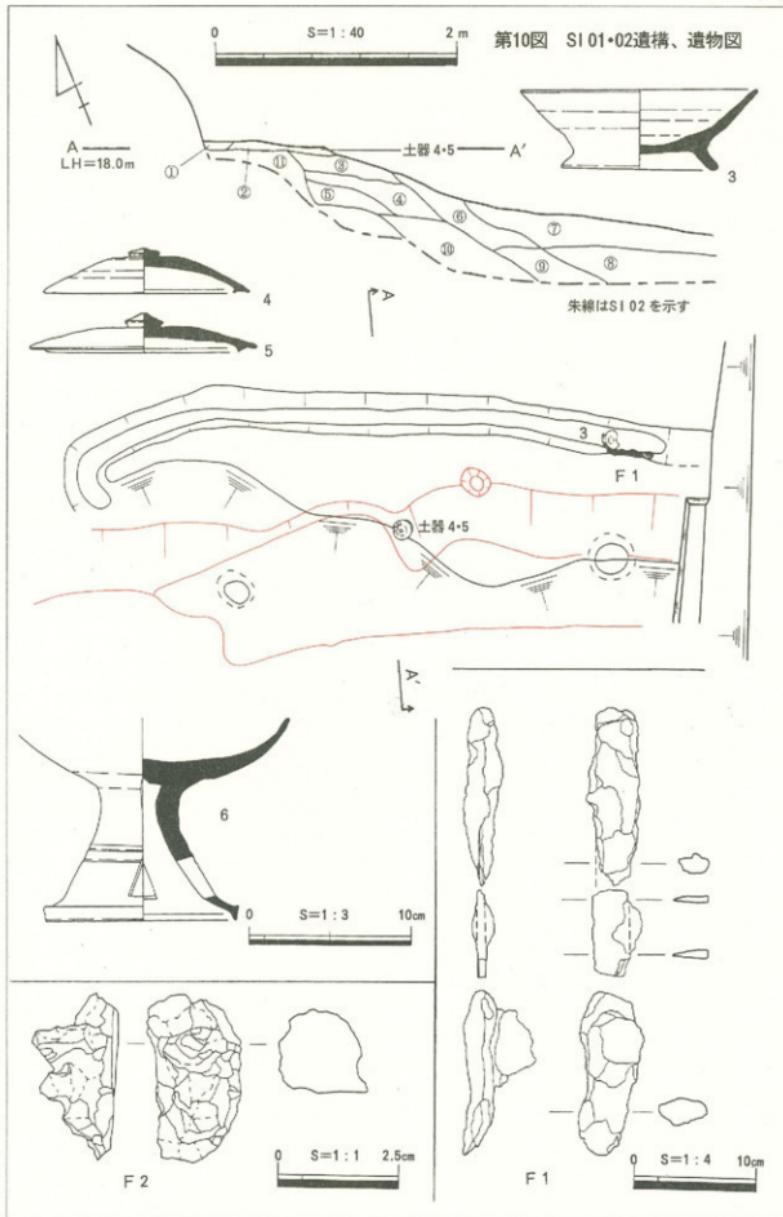
第8図 5区5トレンチ第一遺構面平面図

第9図 土層名一覧表

1 淡赤色砂質土(盛土)	2 明明白茶色砂質土	3 白茶色砂質土	4 暗灰色砂質土
5 淡白茶色砂質土	6 淡赤褐色砂質土	7 暗茶灰色砂質土	8 明茶灰色砂質土
9 暗灰色砂質土	10 灰色砂質土	11 白色砂質土	12 灰色砂土
13 黒灰色土	14 濃茶色砂質土	15 灰色砂質土	16 赤褐色砂質土
17 暗黒色砂質土	18 暗茶色砂質土	19 淡茶色土	20 明赤黄色砂質土
21 黒色土	22 黑茶色粘質土	23 赤茶色粘質土	24 濃赤褐色粘質土
25 濃赤褐色粘土	26 濃茶褐色粘土		



第9図 5区3、4、5トレーナ平面図

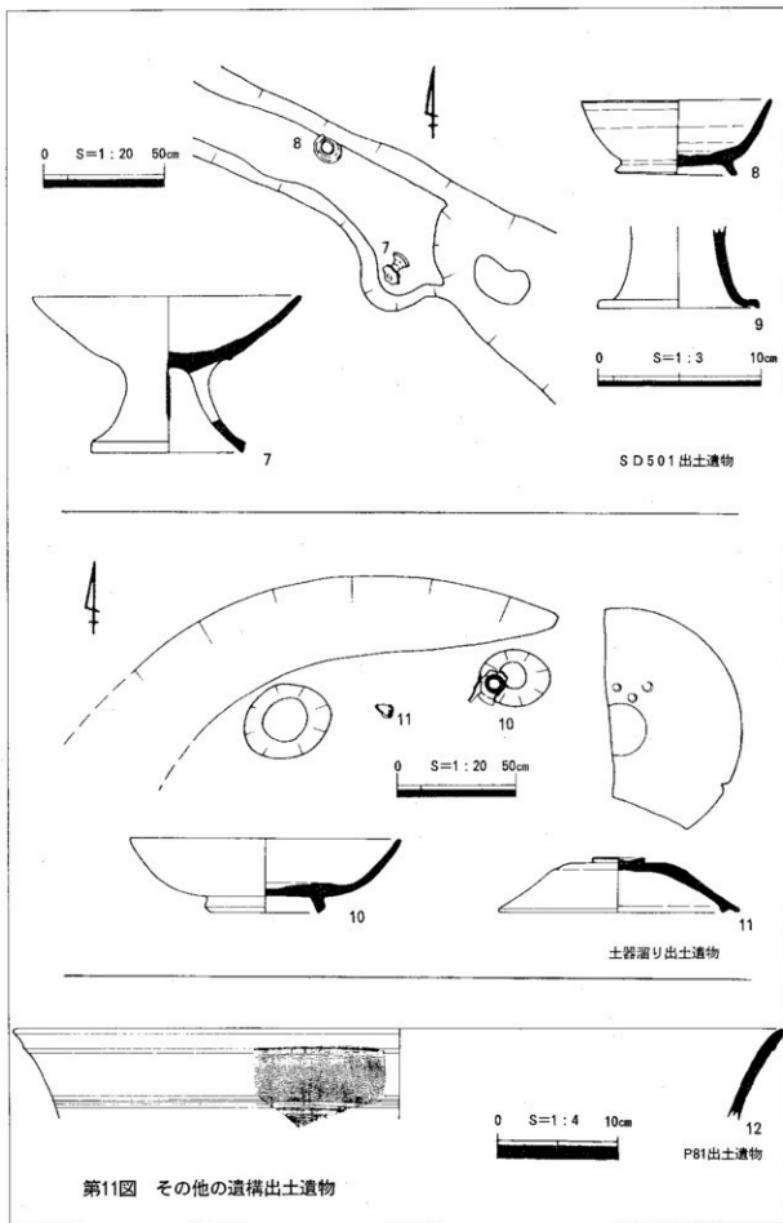


出土遺物 黒色土の包含層、ピットなどから出土した。遺物の概要については、遺構から出土したものは遺構の解説文中に、遺構に伴わないものは、遺構外出土遺物として第7節において述べている。また遺物の詳細は出土遺物一覧表に記した。2は須恵器高坏の脚端部。3は須恵器坏身で高台部は大きく外方へ「ハ」の字に張り出す。4、5は須恵器坏蓋である。やや退化した宝珠つまみに、返りがつく。2点とも住居跡床土より出土しており、周溝上より出土した土器3とは多少のタイムラグが想定される。6は試掘調査で出土した須恵器高坏である。二段の脚に三角形の透しを持つ。不明鉄製品F1は、土器3と共にSI01の溝内より出土している。全長36cm、幅4cm、厚さ0.6cmを計る。断面は鉄刀状をなす。F2は埋納容器（土器4、5）内から出土した鉄滓である。全長3.4cm、幅2cm、高さ1.7cm、重さ8グラムで全体的に鋳化している。出土した状況から、何らかの祭祀に伴う遺物であろう。7、8、9はSD501から出土した須恵器である。10、11は土器溜りから出土した須恵器である。10は浅い坏部に径の小さな高台を持つ。11は環状を呈するつまみを持つ。両者はセットになるものと思われる。12はP81の埋土中より出土した須恵器の甕、口縁部片である。口径は63.5cmで、外面に波状紋が巡る。

第7節 遺構外出土遺物

遺構に伴わない遺物は、ほとんどが盛土層及び、黒色土層中より出土している。傾向としては、トレンチ南側の斜面低地部より出土するものが多い。また底部に糸切りの痕跡を残す坏身などは、トレンチの南西部より多く出土しており、当該期の遺跡である宮の谷4区からの転落遺物と考えられる。遺構外出土遺物の年代については、弥生時代後期から認められ、古墳時代後期から奈良時代にかけての時期が集落の盛期といえよう。そして平安時代から近世にかけては、出土遺物から人為の生活痕跡を見いだすことはできない。また近世の遺物については、陶胎染付の存在や、煙管の年代観から、17世紀末頃から18世紀後半にかけての時期に求められよう。以下、遺構外出土遺物の概要について示す。

弥生土器（第12図-13～19）13は、底部平底の壺形土器である。全体的に風化しているが、外面にはミガキ、内面にはケズリ調整を行った痕跡が読み取れる。体部外面には黒斑がみられる。15は弥生時代後期に相当する。埴輪（第12図-20、21）。20は土師質で、内外面ともナメハケ調整を施し、突帯を張り付ける。21は須恵質で、内外面ともナメハケ調整を施す。どちらも突帯の裏面に沿って指押さえの痕跡が読み取れる。土師器坏、皿（第13図-22～26）。出土数は少なく、小破片ばかりで完形品はない。25は高台径16cmの坏Bで、淡赤褐色を呈する。26は皿で、口径18.2cmを計る。外面に若干、朱彩された痕跡を残す。土師器、煮炊具（第13～16図-27～60）。27～54は甕である。甕は、口縁部を大きく外反させ、外面を刷毛、内面に削り調整を施すものが多い。また口縁部内面に横方向の刷毛調整を施すものがある。55～57は瓶である。55は、口径27.1cm、器高25.9cmで、底部の四方向に小孔を開ける。56は、19.5cmの小形品である。どちらも外面にタテハケ、内面にケズリ調整を施す。57は、瓶の取手部とみられる。58～60は、土製支脚の破片である。須恵器坏身（第17～18図-61～104）。61～73は坏豆類で。73は内面に「×」のヘラ記号が見られる。74～79はやや浅い坏身である。口縁部は外方に伸びる。80～82は底部が平底状を呈する坏である。83～86は真っ直ぐ外方に立ち上がる坏である。器壁はややシャープな印象を受ける。87は口縁部が内湾する鉢か。88～99は高台を持つ坏、いわゆる坏Bである。94は底部に須恵器甕の破片が付着している。焼台の痕跡か。98、99は底部に糸切り痕を残す。100～104は、底部に糸切り痕を残す。陰田10期に認められる器形で、8世紀後半頃の年代が想定されている。須恵器皿（第19図-105、106）。105は、底部にヘラ記号を施す。106は口径14.8cmを計る。回転ナテ調整で、底部は糸切痕を残す。須恵器坏蓋（第19図-107～119）。109～113は環状つまみを持つ蓋である。114～118は返りを持つ。119は返りの消失した蓋である。坏Bに伴うものであろう。須恵器高坏（第19図-120～125、第20

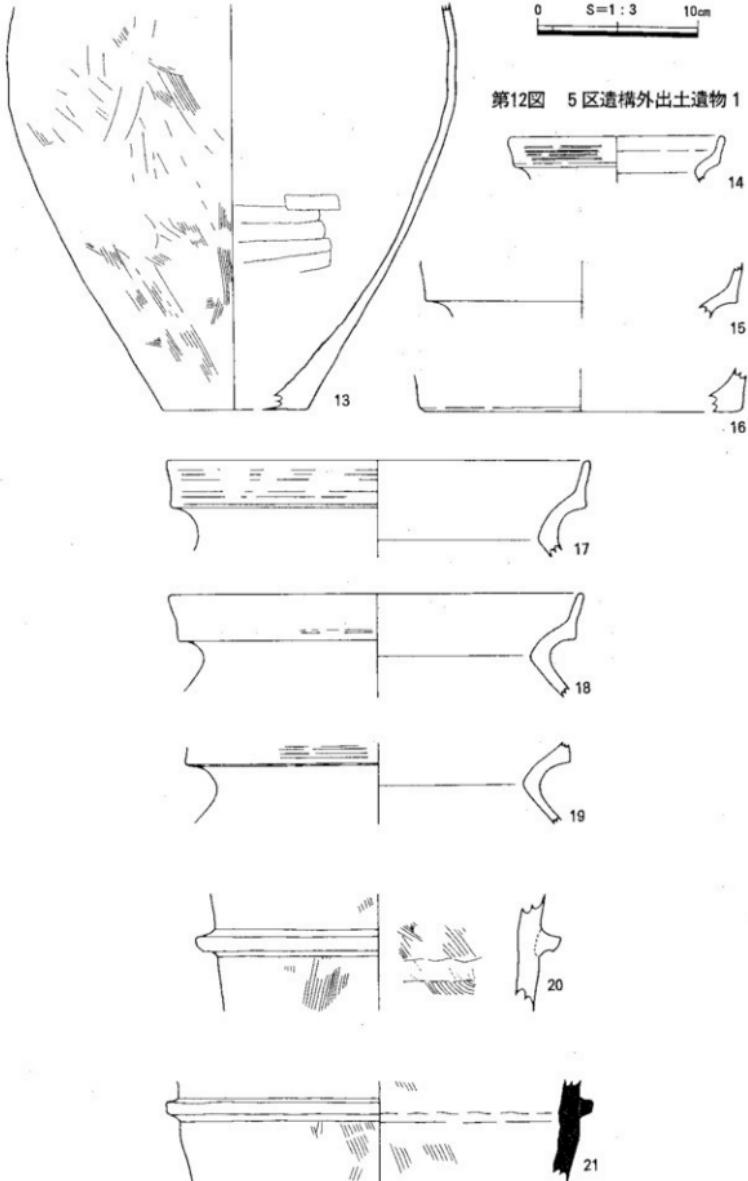


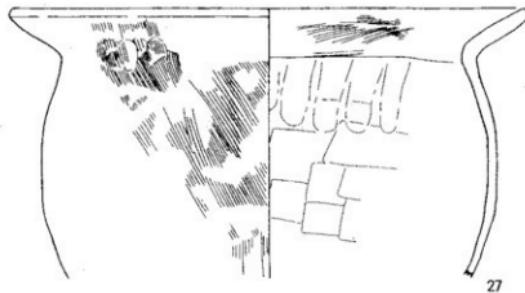
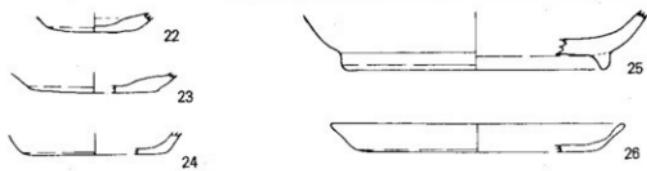
第11図 その他の遺構出土遺物

図-126～129)。脚部の透かし孔は、125のような三角形のものと、128のような線状のものがある。126～129はやや小形の高壺であろう。須恵器壺(第20図-130～132、第21図-136～138)。131は、肩部が大きく張出し、底部がややすぼまつた平底状をなす壺である。外面にはタタキ、内面には同心円の当て具の痕跡を明瞭に残す。これまでの陰田遺跡群の調査では、類似する器形の壺は見られない。須恵器壺(第20図-133～135、第22図-139～142)。140は同部が玉葱状を呈する。須恵器鉢(第22図-143)。外面に小突帯を巡らす鉢とみられる。陶胎染付(第22図-144、145)は口縁部と高台部が出土している。胎土と、釉の類似から同一固体の可能性がある。145は、高台径5.1cmで、高台内は露胎。土錐(第22図146～149)は4点出土している。146は、全長3.5cm、幅3.7cm。147は、全長2.5cm、幅2.5cm。148は、全長2.6cm、幅2.7cm。149は、全長2.1cm、幅0.7cm。すべて手づくね整形による。石罐(第22図-S 1～S 3)は、S 1、S 2は黒耀石製で、S 3はサヌカイト製とみられる。S 1は、全長2.3cm、幅1.8cm、厚さ0.2cm、重量は0.85グラムである。S 2は、全長2.1cm、幅1.1cm、厚さ0.5cm、重量0.65グラムである。S 3は、全長1.5cm、幅1.2cm、厚さ0.2cmである。煙管(第22図-B 1)は真鍮製キセルの雁首部である。全長5.1cm、火皿の立上がりは0.7cm、直径は1cmである。羅字との接合部には、一部木質が遺存する。側面に製作時に接合した痕跡が残る。古泉編年のV～VI期(18世紀後半から19世紀)に相当する。銅錢(第22図-B 2、B 3)は、17点出土したが、この内、2点のみ拓本を掲載した。B 2は、「寛永通宝」で裏面にもう一枚錯着している。B 3は、半分を欠損し、表面は摩滅が著しく文字が不鮮明だが「□宋通寶」と読める。「皇宋通寶」(初鑄1037年)か。不明鉄器(第22図-F 3)は、全長12.8cm、幅5.5cm、厚さ1.5cmを計る。表面は鋸の進行が激しく風化している。形態は環頭太刀風だが、断面の形態から本体は2本の鉄棒より成っている。火箸のようなものか。

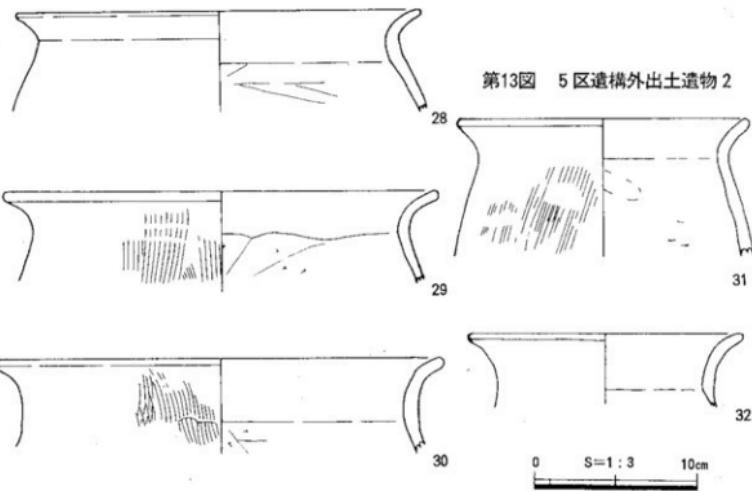
0 S=1:3 10cm

第12図 5区造構外出土遺物 1

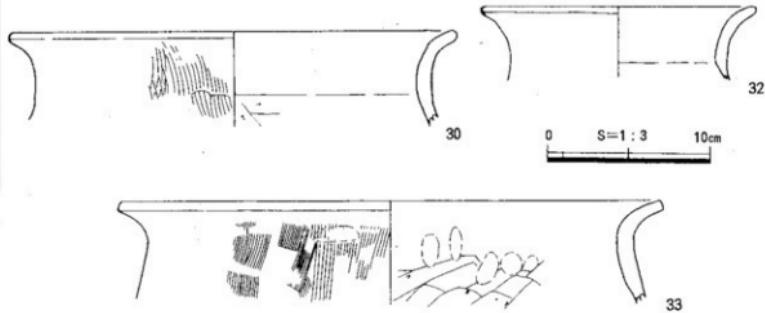


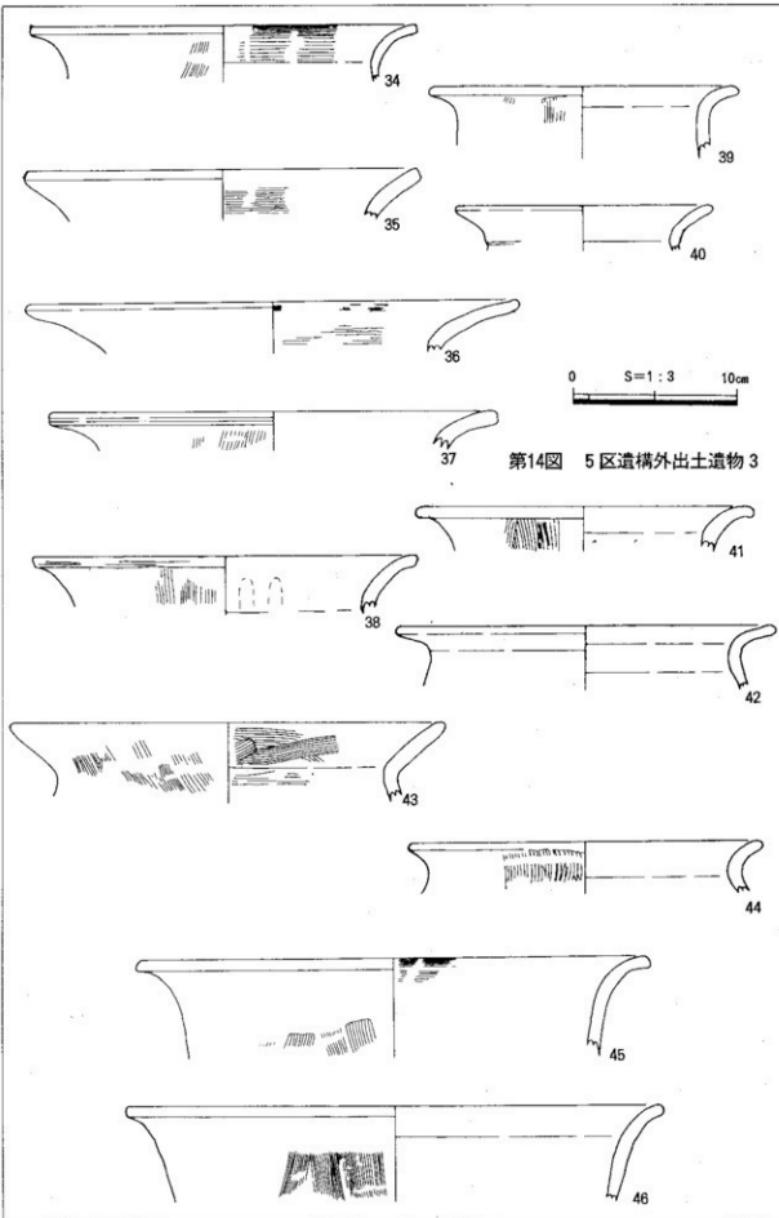


第13図 5区遺構外出土遺物 2

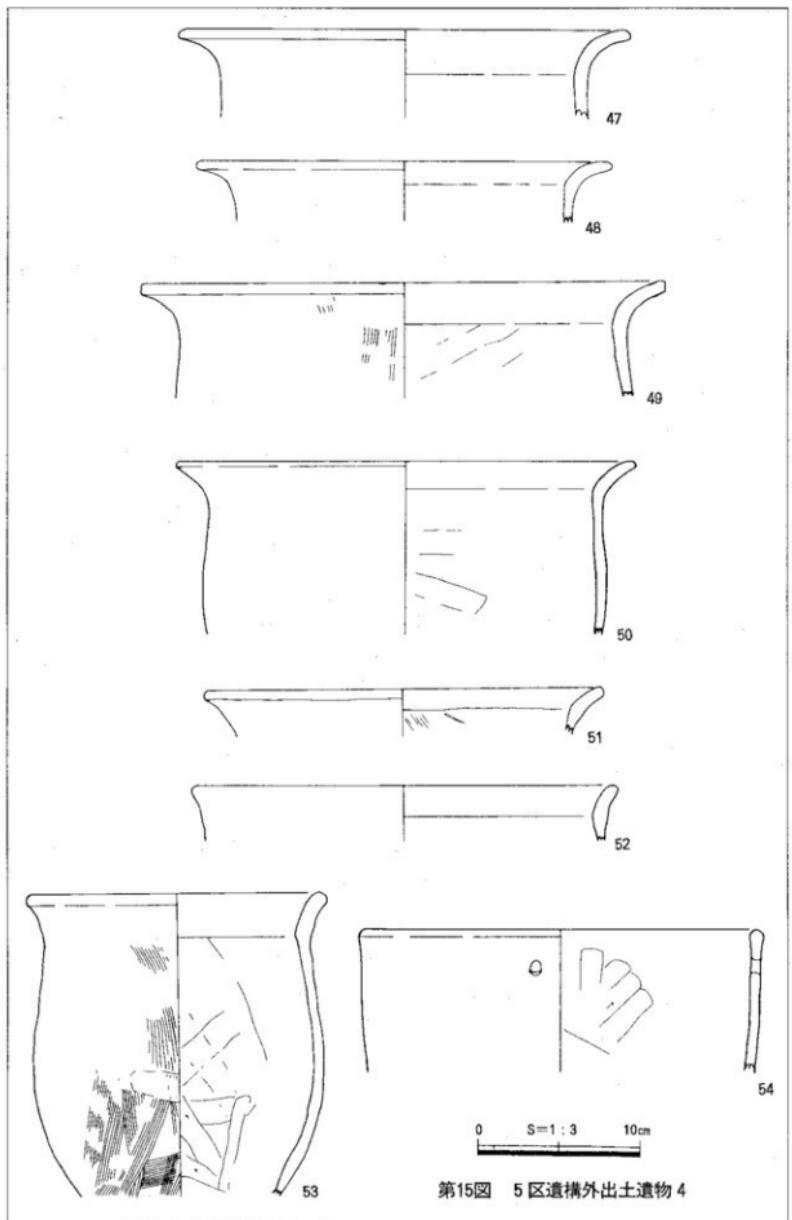


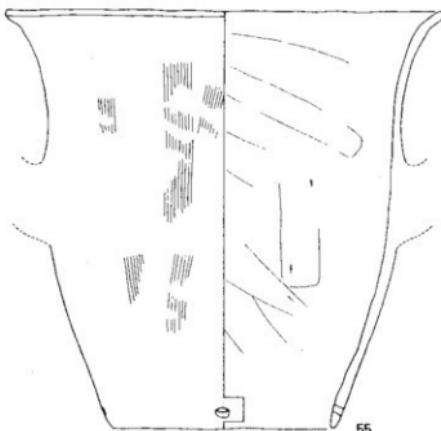
0 S=1:3 10cm





第14図 5区遺構外出土遺物 3





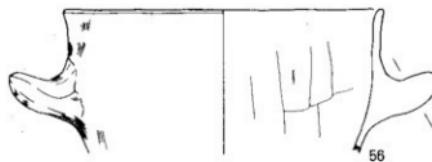
55



57



58

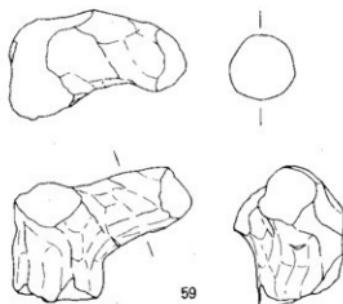


56



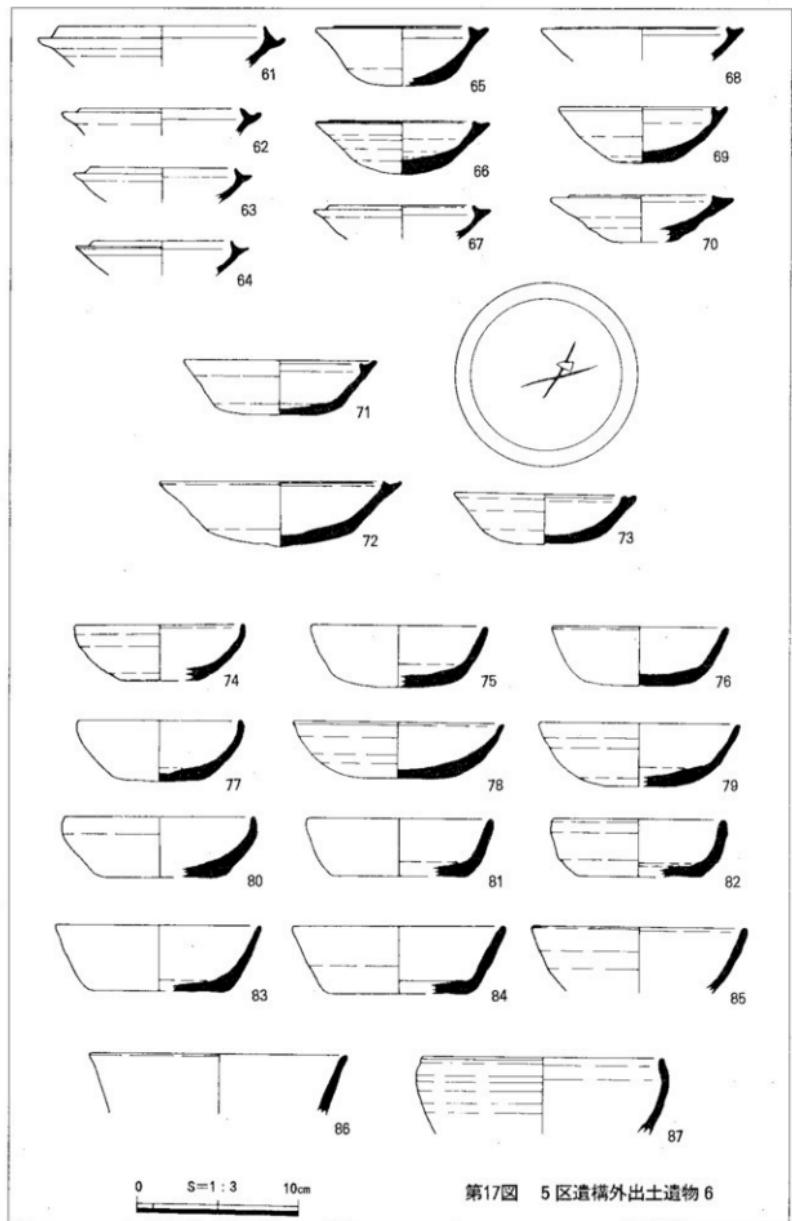
60

0 S=1:3 10cm

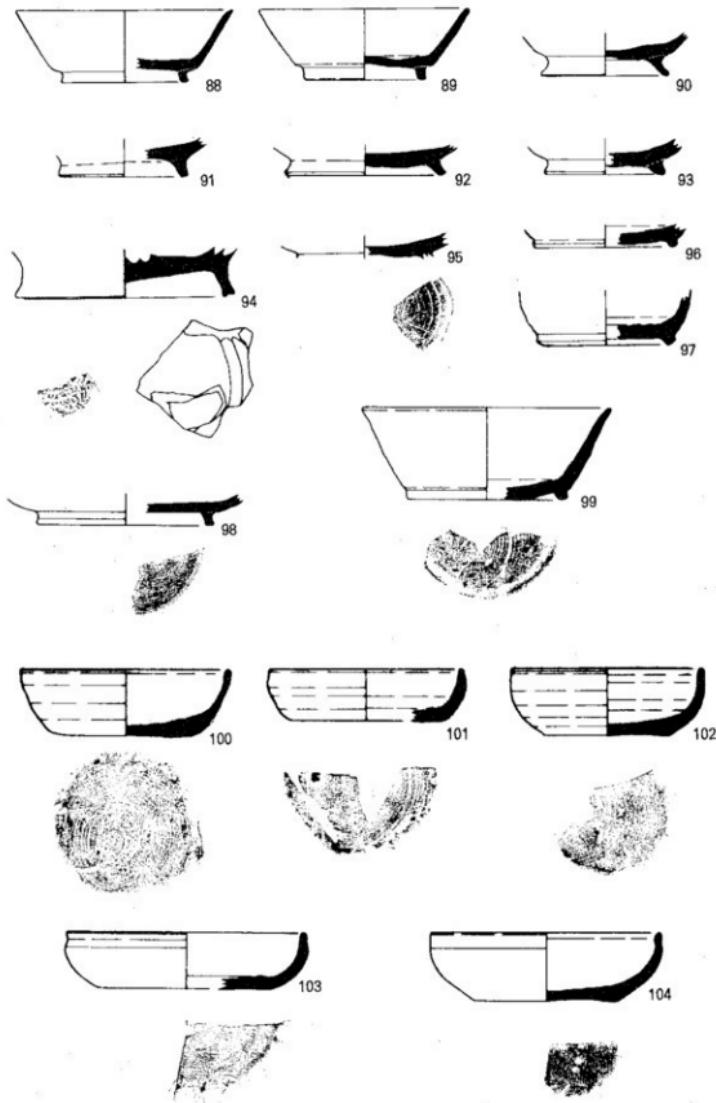


59

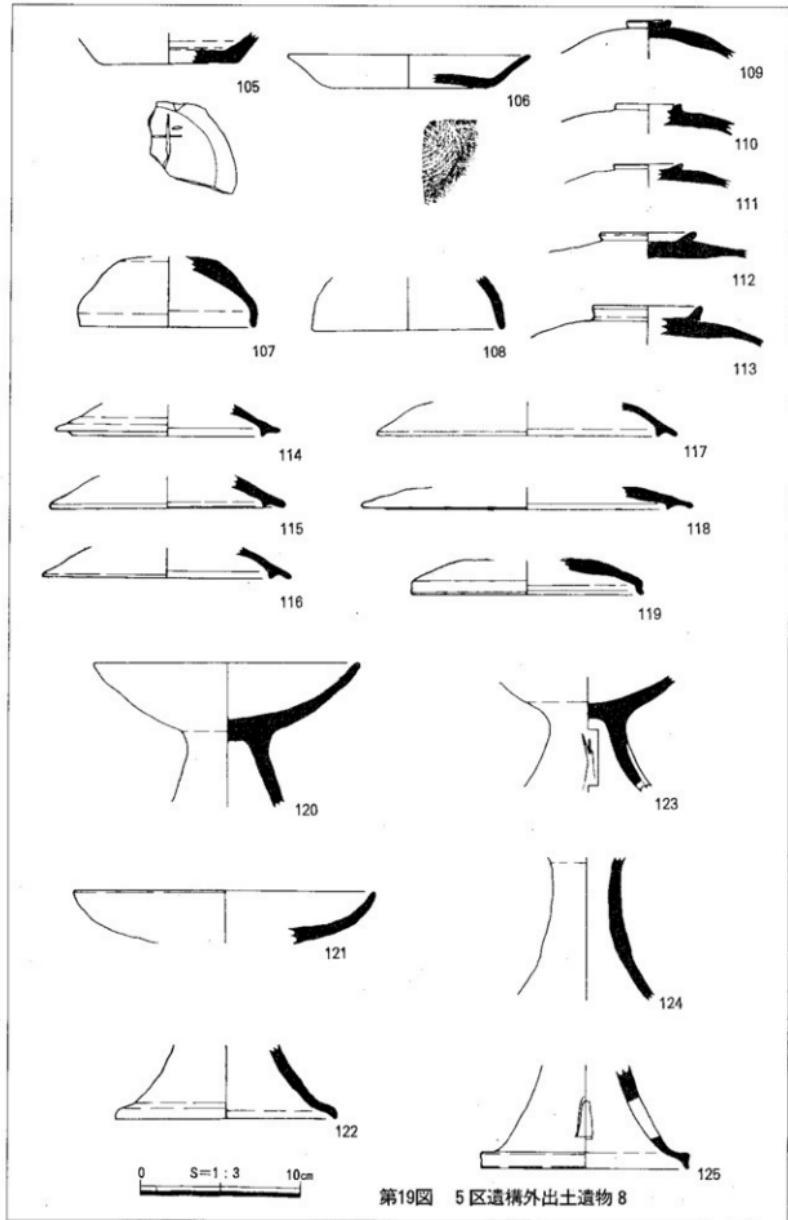
第16図 5区遺構外出土遺物 5



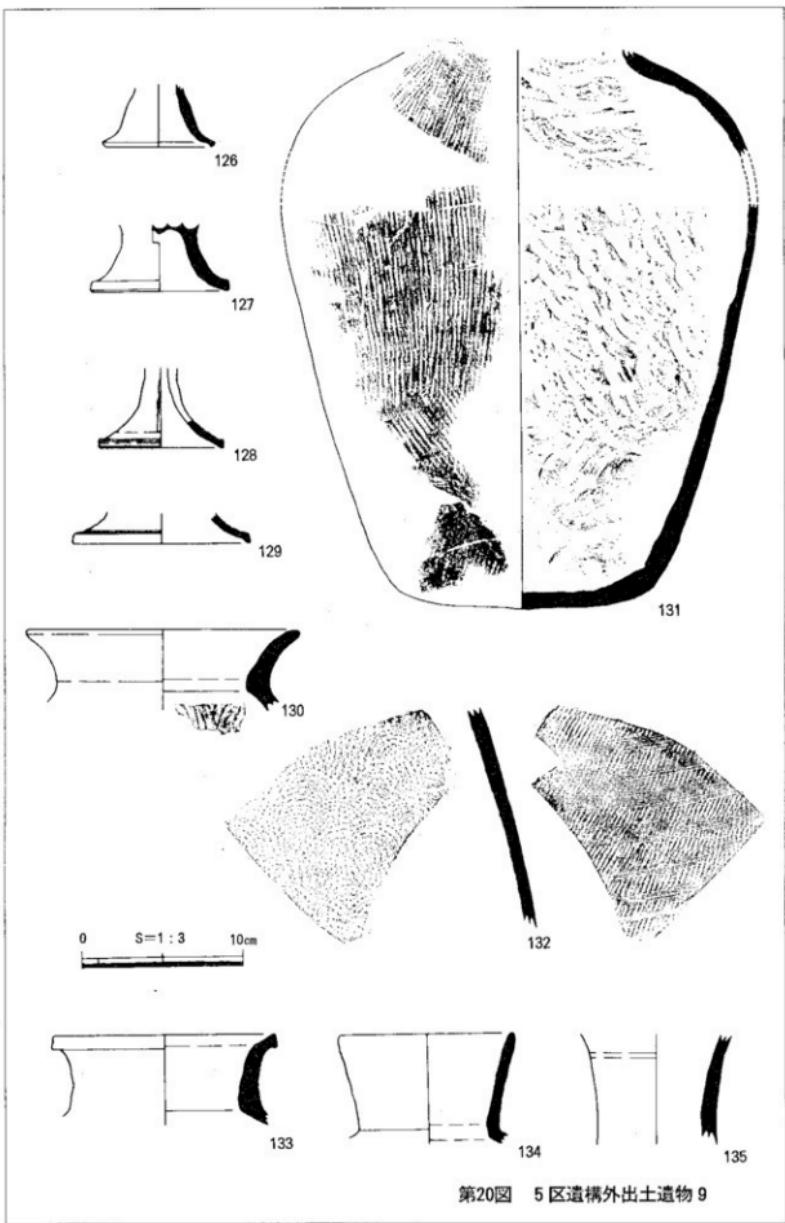
第17図 5区造構外出土遺物 6



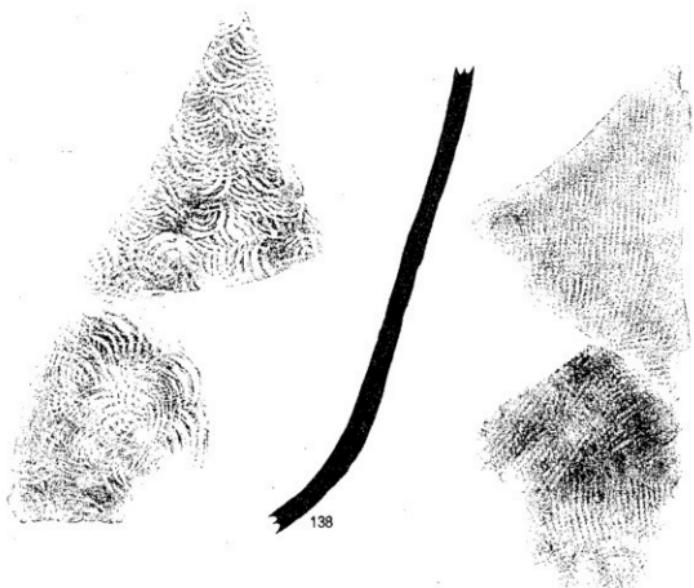
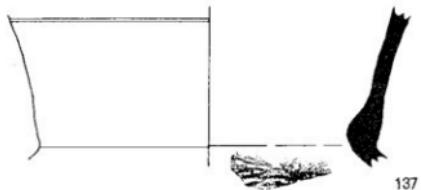
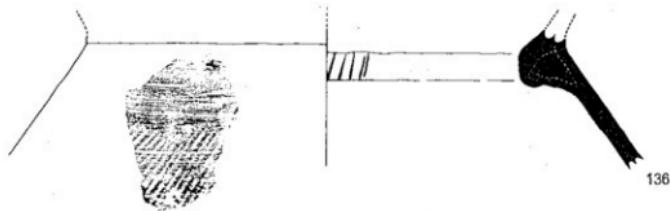
第18図 5区遺構外出土遺物 7



第19図 5区遺構外出土遺物 8

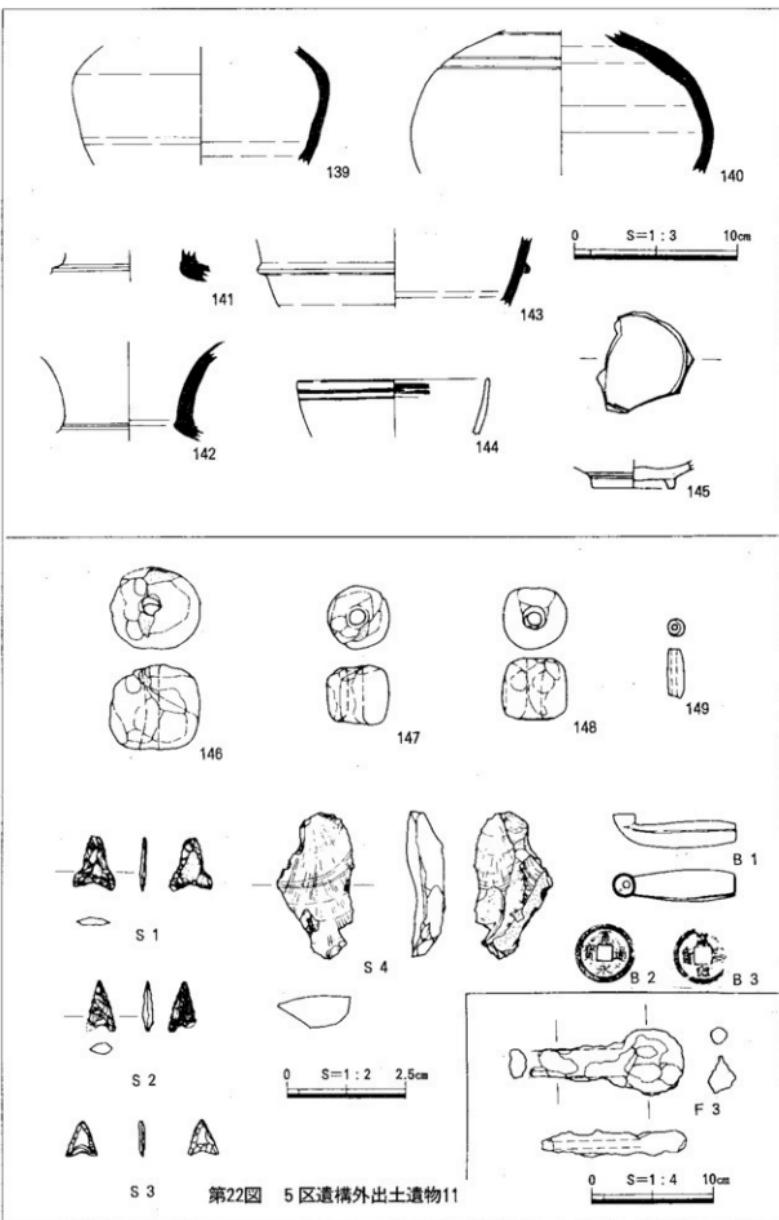


第20図 5区遺構外出土遺物 9



0 S=1:3 10cm

第21図 5区造構外出土遺物10



第5章 ま　と　め

第1節 遺構について

今回の調査では、4区において溝状遺構、5区においてテラス状遺構や、溝、ピット、住居跡などの遺構を多數検出し、貴重な資料を得ることができた。なかでも、5区5トレンチのSI 01の床土中から、小鉄滓を須恵器環蓋を重ねて埋納した状況を確認したことは特筆すべきものであろう。その行為の意図は、建物を建てるにあたって行われた地鎮遺構と考えられる。これに関連した地鎮遺構の類例調査を行ったが、これまでに管見に触れたものはなかった。また古墳供獻例では、多數あるものの、土器に納められて供獻されたものは5例程しかない。(福岡県宗像市の浦谷古墳群H1-4号墳に奈良時代の埋納例がある。これは遺構の性格は不明であるが、単独で埋められている状況からすると、骨蔵器や胞衣埋納遺構の可能性が高い) 今回の事例では、同じ建物跡から鉄刀状鉄器が出土しており、鉄生産に関わる建物と推察される。またこの建物の下層にも住居跡と見られる落ち込みがあり、住居の建替に当たって地鎮を行ったものであろうか。鉄滓の住居跡からの出土例についても、床土内やピットからの出土例がそのまま見過ごされている可能性があり、鉄滓が出土した位置については注意を払う必要がある。

第2節 遺物について

須恵器については、古墳時代からの伝統型式である環H類から、陰田10期(世紀8世紀後半)の环身が出土している。環Bは高台が「ハ」の字に広がるタイプが主体となる。また环蓋に関しては返りの消失しないタイプが多く、7世紀末までの時間幅にはほぼおさまる。そのほかにも口縁部が外反する壺や環状つまみを持つ环蓋がみられ、時期的には7世紀中頃から8世紀初頭の遺物が主体をなすと言える。また土師器については、細片化し、風化したものが多く実測に耐えないものが多いが、大きく拡張した口縁内面に横方向のハケ目を持つ甕や、小形の瓶形土器、土製支脚、皿などがみとめられる。傾向として煮炊具がほとんどを占め、食器類が極めて少ない。陰田下山遺跡などでは、まとまって土師器の食器類が出土しており、これらは、遺跡の性格の違いに起因するものと考えられる。そのほかには竹管紋を施した須恵器蓋(第11図、11)が出土した。これまでのところ、類例は島根県安来市の石田遺跡出土資料、白コクリ遺跡の横穴墓出土資料の2例しかなく、分布が中海南沿岸部にみられることから、同一の工人によるものと考えられ、須恵器の流通を示す資料となる。

近世の遺物として、陶胎染付や煙管、寛永通宝など出土している。これらは表土やその直下から見いだされたもので、かなり攪乱を受けた状態での出土であった。これは戦後竹林の造成にあたって、ダイナマイトで山を崩して土を入れており、その時に攪乱された遺物であろう。かつて宮の谷一帯には近世墓地が所在したということで、これら遺物は近世墓に伴うものと考えられる。(註1)

第3節 遺跡について

陰田宮の谷遺跡の変遷についてまとめる。今回の調査では、弥生時代の遺構は確認されなかったが、土器を検出し、該期の遺跡が付近に存在すると思われる。古墳時代の遺物として埴輪片の出土があった。これは尾根筋に存在する古墳から転落したものと思われる。そして7世紀後半に至り宮の谷5区において住居が築かれる。この時期には北に所在する陰田第6遺跡の規模が縮小し、集落の移動、分散が起きた時期である。その後奈良時代に至り、第6遺跡も集落としての機能を回復し、宮の谷遺跡でも遺物の出土が顕著に見られるようになる。しかしそれら活動も平安時代には継続せず、8世紀末に集落としての機能を停止させる。その後、人間活動の痕跡は途絶えるが、近世には墓地として利用され、現代に至って竹林として利用された。このように宮の谷遺跡は7世紀から集

落が形成され、9世紀には終焉する。これら集落の消長も、山を隔てた陰田第6遺跡と連動しており、両遺跡の関係が注目される。

第4節 結語

今回の調査で、7世紀後半の住居を確認したことと、隣接する陰田第6遺跡との連続性がより明らかとなつた。これまでの調査で、陰田遺跡群は鉄生産を生業とした集団の集落と推定されているが、遺跡群内において顕著な鉄滓の大量投棄跡などは見られず、当地での大規模な鉄生産を推定することは困難な状況である。これらの原因として、伯耆国の調税に鉄が納められていたという事実があり、それらの生産を示唆するものではないか。また人民が私的に鉄を生産することは認められており、陰田遺跡群の鉄生産が内需需要を満たすためという指摘は妥当な解釈といえよう（註2）。また、7世紀後半以降から、陰田第6遺跡は官衙的様相を帯びる一方、これに近接する陰田マノカシヤマ遺跡、陰田荒神谷遺跡において、鉄滓の出土が顕著にみられるようになる。これらの変化は、個人的レベルで行われていた鉄生産を組織化し、生産から流通までの流れを一元的に管理する体制へと整備した、いわば古代における律令体制の浸透を想起させるものといえよう。また今後の調査によって、遺跡群内のみならず、伯耆国全体での鉄生産遺跡の分布と、その消費の実態を明らかにする必要があると考える。

註1……陰田第6遺跡の尾根上で近世墓群が調査されているほか、宮の谷遺跡4区でも近世墓とみられる炭溜まりが検出されている。『陰田』『萱原・奥陰田II』

註2……1996年 『陰田遺跡群』 鳥取県教育文化財団

第6章 自然科学的分析

第1節 隕田遺跡群出土須恵器の胎土分析

(三辻利一)

Fe因子は明確に地域差を示す場合もあるが、一般的にはそうでない場合が多い。そのため、これまででは参考的にしか使わなかったのである。ただ、隕田遺跡群出土須恵器についてはFeの含有量によるおおまかな分類に、上手い具合に、K-Ca、Rb-Sr分布図での分布が対応したことは前述した通りである。(註1)

ここで視点をかえて、もう少しきちんとした方法で土器胎土を分類した。そのために、大集団をいくつかの小集団に分類するクラスター分析という統計学の手法の一つを採用した。

図1には7~8世紀代の須恵器をクラスター分析で分類した結果を示す。使用した因子はK、Ca、Rb、Srの4因子である。このような図をデンドログラム(樹状図)といふ。図1の樹状図をみると、いくつもの小枝が大枝にまとめられていることがわかる。ただ、クラスター分析の問題点はどこの枝で区切って一つの集団にするかという点に客觀性はないという点である。つまり、集団の区切り方については研究者の主觀にまかされることになる。そこで筆者はK-Ca、Rb-Srの両分布図での分布を参考にしつつ、デンドログラムの集団を区切ることにした。

まず、NO90~9までを一つの集団として採用した。これをA群と名付ける。A群の両分布図を図2に示す。よくまとまって分布し、K、Ca、Rb、Srの4因子からみて同じ胎土をもつものの集団であることを示している。

次に、NO20~10までをもう一つの集団とし、これをB群と名付ける。B群の両分布図を図3に示す。B群の資料もよくまとまって分布し、両分布図で集団を形成することがわかる。そして、A群領域とは全く異なる領域に分布することがわかる。

A、B群の分類結果は表1にも示されている。B群の資料には例外なく、Fe含有量が多いことがわかる。逆に、A群の資料にはFe量は少ない。

Fe含有量によって隕田遺跡群の須恵器をおおまかに分類することは前述したが、クラスター分析による分類結果も、よくそれに対応している。ただクラスター分析という統計学の手法を使った分だけ、結果は引きしまっている。その結果、未分類の資料が何点か出た。図1より、NO13~112が未分類資料である。これらの資料については今回、考察から除くことにした。

次に、古墳時代後期と推定される須恵器のクラスター分析の結果を図4に示す。NO13~6をC群、NO3~63をD群とした。分類結果は表1に示してある。NO20、28、17、82、7の5点が未分類資料である。

C群の資料の両分布図を図5に示す。この図には比較対照のため、A群領域を示してある。ここで注目すべき点はC群の資料はA群領域に対応するが、必ずしも、びたりとA群領域には対応しないという点である。つまり、C群の須恵器胎土はA群の須恵器胎土と類似するが同じではないということである。このことはC群の須恵器の素材粘土はA群の須恵器の素材粘土と同じ地域内で採取されたものであっても、同じ場所で採取されたものではないということである。A群は奈良・平安時代の須恵器であり、C群は古墳時代の須恵器であるから、当然といえば当然である。D群の資料の両分布図は図6に示す。C群の須恵器にはA群と同様、Fe量が少ないが、D群の須恵器にはB群のようにFe量が多い。つまり、D群の須恵器胎土はB群に似ている訳である。しかし、図6と図を比較すると、D群の分布位置とB群の分布位置とは必ずしもびたりとは一致しないことがわかる。

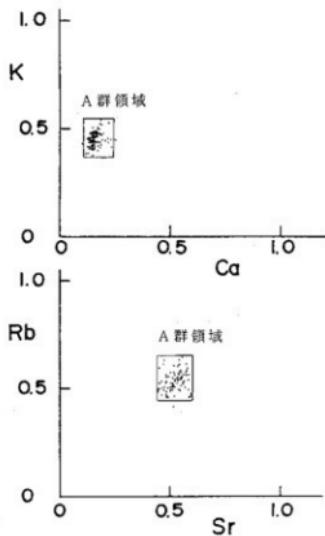
以上のことから、次のような結論が引き出される。

- ・古墳時代後期には Fe 量の比較的少ない C 群と、逆に Fe 量の多い D 群の 2 種類の胎土がある。
- ・同様に、奈良・平安時代にも、Fe 量の少ない A 群と、Fe 量の多い B 群の 2 種類の胎土がある。

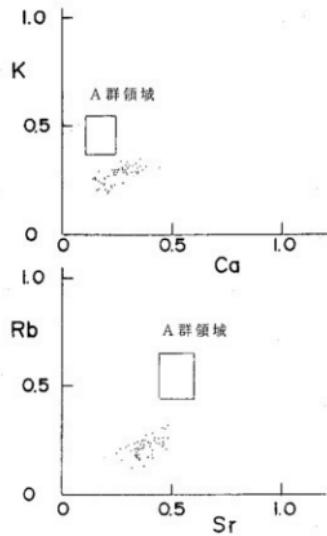
こうして、陰田遺跡群は古墳時代から平安時代に至るまで、主として、2ヶ所の生産地の製品が供給されていたことが判明した。しかし、A群とC群、B群とD群はそれぞれ、少しづれており、古墳時代後期と奈良・平安時代では同じ地域の別場所で採集された粘土が素材として使用されており、その結果、製品の須恵器の両分布図における分布が微妙にずれることになったと解釈された。

註 1 ……1998年 『萱原・奥陰田 II』 (財)米子市教育文化事業団

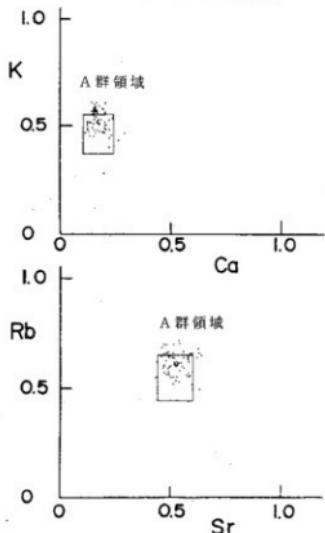
A群の須恵器の両分布図



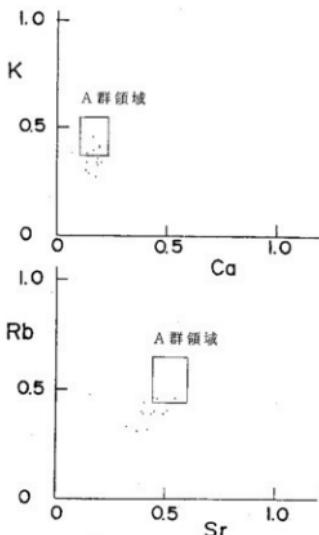
B群の須恵器の両分布図



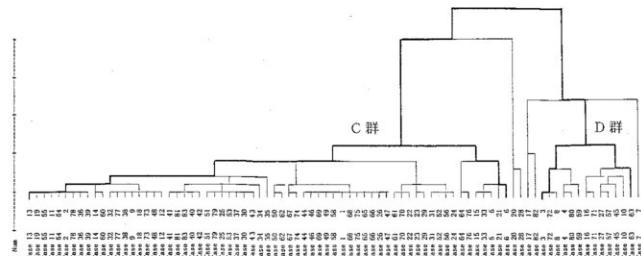
C群の須恵器の両分布図



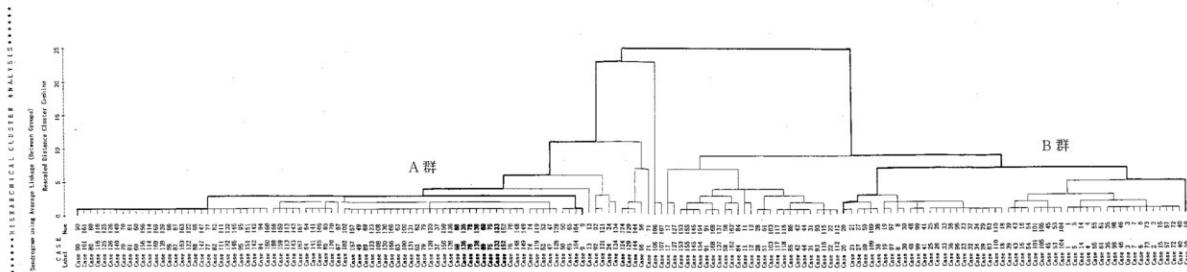
D群の須恵器の両分布図



古墳時代後期の須恵器のデンドログラム



7-8世紀代の須恵器のデンドログラム



第2節 米子市、陰田宮の谷遺跡における蛍光X線分析

株式会社 古環境研究所

1. 試 料

試料は7世紀後半頃とされる5区の住居跡の床土中から出土した金属塊である。この金属塊は、須恵器の蓋を二枚合わせた中に埋納されていたものである。ここでは、埋納された物質の種類（鉄滓か他の金属滓か）を同定する目的で蛍光X線分析を行った。測定は、金属が露出している突起部および金属塊中央平坦部の二箇所について行った。

2. 分析方法

エネルギー分散型蛍光X線分析システム（日本電子株式会社）を用いて、元素の同定およびフランダメンタルパラメータ法（PF法）による定量分析を行った。次に試料の処理法を示す。

- 1) 超音波洗浄器を用いて試料を洗浄（300W・42KHz・10分間）
- 2) 試料を絶乾（105℃・24時間）
- 3) 分析装置の固定試料ステージに固定
- 4) 測定時間300秒、照射径20、電圧30KeV、試料室内真空の条件で測定

X線発生部の管球はロジウム（Rh）ターゲット、ベリリウム（Be）窓、X線検出器はSi（Li）半導体検出器である。

3. 分析結果

各元素の定量分析結果（wt %）を、表1および図1に示す。

4. 考 察

分析の結果、金属塊からは鉄（Fe 203）をはじめ、珪素（Si 02）、アルミニウム（AL 203）、リン（P 205）、イオウ（SO₃）が検出された。このうち、鉄は含量が84～87%にも達しており、この金属塊の主成分が鉄であることが確かめられた。その他の元素については、金属塊に付着した土などの成分も反映されているものと考えられる。

表1 隠田宮の谷遺跡における蛍光X線分析結果

単位: wt(%)

原子No	化学式	金属塊	
		突起部	平坦部中央
13	Al ₂ O ₃	6.10	6.71
14	SiO ₂	5.99	8.78
15	P ₂ O ₅	0.25	0.28
16	SO ₃	0.60	0.16
19	K ₂ O	0.08	0.08
26	Fe ₂ O ₃	86.98	83.99

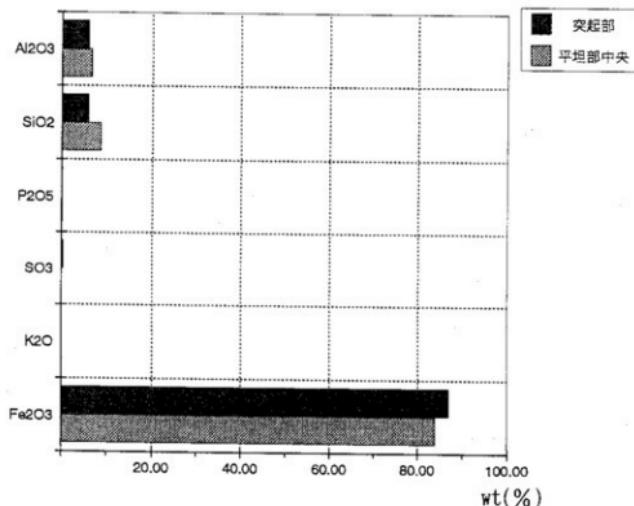


図1 隠田宮の谷遺跡から出土した金属塊の蛍光X線分析結果

● 出土土器観察表 1 (※復元値、△残存値、○推定値)

遺物番号	図版番号	種類	器種	法量	調整・技法	色調	胎土	焼成	備考
1	4	須恵器	皿	口径 □12.8cm 器高 △3.9cm 底径 □7.0cm	外) 莖草紋 内) 不明	具須はやや 白色がかる	緻密	良好	4区2トレ 表土中
2	9	須恵器	高环	器高 △1.8cm 底径 □13.4cm	回転ナデの痕跡をとどめる	暗灰色	緻密	堅緻	SD 01
3	10	須恵器	环身	口径 14.4cm 器高 5.1cm 底径 9.4cm	外) ナデ、静止ナデ 内) ナデ 高台を大きく「ハ」の字に 貼りつける	灰色	密	堅緻	SI 01
4	10	須恵器	环蓋	口径 12.5cm 器高 2.8cm	外) 回転ナデ 内) 静止ナデ 偏平な宝珠つまみ	暗灰色 一部褐色	緻密	良好	SI 01
5	10	須恵器	环蓋	口径 13.8cm 器高 2.5cm	外) ケズリ後ナデ 内) 回転ナデ後静止ナデ 偏平な宝珠つまみ	青灰色	緻密	堅緻	SI 01
6	10	須恵器	高环	器高 12.5cm 底径 10.6cm	回転ナデ 脚部に透しあり	青灰色	緻密	堅緻	試掘出土
7	11	須恵器	高环	口径 □16.3cm 器高 △9.7cm 底径 □9.0cm	外) 回転ナデ 内) 静止ナデ 脚部に2方向の透し	灰褐色	緻密	良好	SD 501
8	11	須恵器	环身	口径 11.5cm 器高 4.7cm 底径 7.2cm	外) ナデ 内) ナデ後静止ナデ 高台貼りつけ、底部へラ 切り	灰色	密	堅緻	SD 501
9	11	須恵器	高环	器高 △5.0cm 底径 □9.8cm	回転ナデ	外) 暗灰色 内) 灰色	緻密	堅緻	SD 501
10	11	須恵器	环身	口径 □16.5cm 器高 4.6cm	回転ナデ後静止ナデ 高台	青灰色	緻密	堅緻	土器通り
11	11	須恵器	环蓋	口径 14.7cm 器高 3.3cm 底径 3.0cm	ナデ後静止ナデ 3つの竹管紋	灰色	緻密	堅緻	土器通り
12	11	須恵器	甕	口径 □63.5cm 器高 △7.4cm	波状紋が巡る	灰褐色	緻密	堅緻	P 81
13	12	弥生土器	壺	器高 △24.8cm 底径 □27.8cm 底深 □9.0cm	外) ミガキ 内) ケズリ	褐色 外) 黒斑	密	良好	
14	12	弥生土器	甕	口径 □13.1cm 器高 △2.9cm	内外面とも風化 口縁に凹線の痕跡あり	淡橙褐色	密	良	
15	12	弥生土器	甕	器高 △3.6cm	内外面とも風化	淡褐色	密	良	
16	12	弥生土器	不明	器高 △2.8cm 底深 □19.3cm	内外面とも風化	灰褐色	密	良好	
17	12	弥生土器	甕	口径 □26.2cm 器高 △6.1cm	内外面とも風化 体部下半ケズリ	淡橙褐色	密	良	
18	12	弥生土器	甕	口径 □25.4cm 器高 △6.5cm	内外面とも風化	淡褐色	密	良	
19	12	弥生土器	甕	器高 △5.2cm 底深 □24.0cm	内外面とも風化	淡褐色	密	良	
20	12	埴輪	円筒	器高 △7.2cm 底深 □22.6cm	内外面とも斜めハケ 内) ナデ	外) 褐色 内) 灰褐色	密	良好	土師質
21	12	埴輪	円筒	器高 △6.3cm 底深 □26.2cm	内外面とも斜めハケ 内) ナデ	淡灰色	緻密	硬質	須賀質
22	13	土師器	壺	器高 △1.2cm 底深 □6.0cm	内外面とも風化	淡灰色	密	良	
23	13	土師器	壺	器高 △1.3cm 底深 □8.0cm	内外面とも風化	淡褐色	緻密	良	
24	13	土師器	壺	器高 △1.4cm 底深 □9.2cm	内外面とも風化	淡褐色	密	良	朱の痕跡
25	13	土師器	壺	器高 △3.7cm 底深 □16.0cm	内外面ともナデ	淡赤褐色	密	良好	
26	13	土師器	皿	口径 □18.2cm 底深 □13.0cm	内外面とも風化	淡黄褐色	密	良	朱の痕跡

●出土土器観察表 2 (※復元値、△残存値、○推定値)

遺物番号	国版番号	種類	器種	法量	調整・技法	色調	胎土	焼成	備考
27	13	土師器	甕	口径 器高 底径 △32.0cm △16.8cm △28.4cm	外) ナナメハケ 内) ケズリ後ナデ 口縁部内面ハケ調整	橙褐色	密	良好	
28	13	土師器	甕	口径 器高 △25.0cm △6.3cm	外) 風化 内) ケズリ	褐色	密	良好	
29	13	土師器	甕	口径 器高 △26.6cm △5.8cm	外) ハケ 内) ケズリ 口縁部ナデ	橙褐色	密	良好	
30	13	土師器	甕	口径 △27.4cm	外) ハケ 内) ケズリ 口縁部ナデ	褐色	密	良好	
31	13	土師器	甕	口径 器高 △17.6cm △8.7cm	外) ハケ 内) ケズリ 口縁部ナデ	橙褐色	密	良好	
32	13	土師器	甕	口径 器高 △16.6cm △4.4cm	内面下半ケズリ 口縁部ナデ	橙褐色	密	良好	
33	13	土師器	甕	口径 器高 △33.4cm △6.4cm	外) ハケ 内) ケズリ 口縁部ナデで面をなす	淡橙褐色	密	良好	
34	14	土師器	甕	口径 器高 △23.6cm △3.6cm	外) ハケ 内) ケズリ 口縁部内面ヨコハケ	淡褐色	密	良	
35	14	土師器	甕	口径 器高 △24.0cm △3.1cm	外) ナデ 口縁部内面ヨコハケ	暗褐色	密	良	
36	14	土師器	甕	口径 器高 △31.0cm △3.2cm	口縁部外面ナデ 口縁部内面ハケ	淡灰色	密	良	
37	14	土師器	甕	口径 器高 △17.2cm △2.4cm	外) ハケ 内) ナデ 口縁部凹腹が造る	淡褐色	密	良好	
38	14	土師器	甕	口径 器高 △23.6cm △3.7cm	外) ハケ 内) ナデ	淡橙褐色	密	良好	
39	14	土師器	甕	口径 器高 △18.2cm △4.6cm	外) ハケ 内) ケズリ 口縁部ナデ	橙褐色	密	良好	
40	14	土師器	甕	口径 器高 △15.7cm △2.9cm	口縁部ナデ	褐色	密	良好	
41	14	土師器	甕	口径 器高 △19.8cm △2.8cm	外) ハケ 内) ケズリ 口縁部ナデ	外) 淡褐色 内) 褐色	密	良好	
42	14	土師器	甕	口径 器高 △22.8cm △3.1cm	外) 風化 内) ケズリ	淡褐色	密	良	
43	14	土師器	甕	口径 器高 △26.0cm △5.0cm	内外面ともハケ 口縁部内面ハケ	淡褐色	密	良好	
44	14	土師器	甕	口径 器高 △21.4cm △3.2cm	外) ハケ 内) 風化	淡橙褐色	密	良	
45	14	土師器	甕	口径 器高 △31.2cm △6.2cm	内外面ともハケ 内面下半はケズリ	淡橙褐色	密	良好	
46	14	土師器	甕	口径 器高 △33.0cm △6.0cm	外) ハケ 内) 風化 口縁部ナデ	淡褐色	密	良	
47	15	土師器	甕	口径 器高 △27.2cm △5.5cm	外) ナデ 内) ケズリ 口縁部ナデ	橙褐色	密	良好	
48	15	土師器	甕	口径 器高 △25.0cm △3.7cm	外) ナデ 内) ケズリ 口縁部ナデ	橙褐色	密	良	
49	15	土師器	甕	口径 器高 △32.4cm △7.2cm	外) ハケ 内) ケズリ 口縁部ナデで面をなす	褐色	密	良好	
50	15	土師器	甕	口径 器高 △28.0cm △10.8cm	外) 風化 内) ケズリ	外) 暗褐色 内) 褐色	密	良好	
51	15	土師器	甕	口径 器高 △24.7cm △3.0cm	外) ナデ 内) ケズリ 口縁部ナデ	淡橙褐色	密	良	
52	15	土師器	甕	口径 器高 △26.0cm △3.5cm	外) 風化 内) ケズリ	淡褐色	密	良	
53	15	土師器	甕	口径 器高 △18.0cm △18.8cm	外) ハケ 内) ケズリ 口縁部ナデ	褐色	密	良好	
54	15	土師器	甕	口径 器高 △24.0cm △8.9cm	外) 風化 内) ケズリ 口縁部や肥厚する 直徑8mmの穿孔あり	淡橙褐色	密	良	
55	16	土師器	甕	口径 底径 △25.9cm △13.6cm	外) ハケ 内) ケズリ 口縁部ナデ 底部に穿孔あり	淡褐色 外) 黒斑	密	良	

● 出土土器観察表 3 (※復元値、△残存値、○推定値)

遺物 番号	図版 番号	種類	器種	法量	調整・技法	色調	胎土	焼成	備考
56	16	土師器	瓶	口径 △ 19.5cm 器高 △ 9.0cm	内外面ともケズリ	淡褐色	密	良	
57	16	土師器	瓶?	器高 △ 8.1cm	取っ手部 外) 風化	橙褐色	密	良	
58	16	土師器	支脚	器高 △ 4.0cm 底径 △ 11.8cm	外) 指押さえ 内) 風化	橙褐色	密	良	
59	16	土師器	支脚	器高 △ 8.8cm	外) ナデ	橙褐色	密	良好	
60	16	土師器	支脚	器高 △ 8.4cm	外) ナデ	淡橙褐色	密	良好	
61	17	須恵器	环身	口径 △ 12.7cm 器高 △ 2.5cm	内外面ともナデ	暗灰色	緻密	堅緻	
62	17	須恵器	环身	口径 △ 9.8cm 器高 △ 1.6cm	内外面ともナデ	灰色	緻密	堅緻	
63	17	須恵器	环身	口径 △ 9.0cm 器高 △ 2.2cm	内外面ともナデ	灰色	緻密	堅緻	
64	17	須恵器	环身	口径 △ 8.6cm 器高 △ 2.2cm	内外面ともナデ	灰色	緻密	堅緻	
65	17	須恵器	环身	口径 △ 8.3cm 器高 △ 3.7cm	外) ヘラ切り後ナデ	灰色	緻密	堅緻	
66	17	須恵器	环身	口径 △ 9.0cm 器高 △ 3.4cm	外) ヘラ切り後ナデ	灰色	緻密	堅緻	
67	17	須恵器	环身	口径 △ 8.8cm 器高 △ 2.1cm	内外面ともナデ	灰色	緻密	堅緻	
68	17	須恵器	环身	口径 △ 10.6cm 器高 △ 2.1cm	内外面ともナデ	灰色	緻密	堅緻	
69	17	須恵器	环身	口径 △ 10.5cm 器高 △ 3.5cm	外) ヘラ切り後ナデ	灰色	緻密	堅緻	
70	17	須恵器	环身	口径 △ 8.8cm 器高 △ 2.9cm	内外面ともナデ	淡灰色	緻密	堅緻	
71	17	須恵器	环身	口径 △ 11.9cm 器高 △ 3.4cm	内外面ともナデ	青灰色	緻密	堅緻	
72	17	須恵器	环身	口径 △ 13.0cm 器高 △ 4.1cm	内外面ともナデ	灰色	緻密	堅緻	
73	17	須恵器	环身	口径 △ 11.4cm 器高 △ 3.1cm	外) ヘラ切り後ナデ 内) 「×」のヘラ記号	灰褐色	緻密	堅緻	
74	17	須恵器	环身	口径 △ 10.3cm 器高 △ 3.4cm	内外面ともナデ	暗灰色	緻密	堅緻	
75	17	須恵器	环身	口径 △ 10.7cm 器高 △ 3.8cm	内外面ともナデ	青灰色	緻密	堅緻	
76	17	須恵器	环身	口径 △ 10.7cm 器高 △ 3.7cm	内外面ともナデ	青灰色	緻密	堅緻	
77	17	須恵器	环身	口径 △ 10.0cm 器高 △ 4.0cm	内外面ともナデ	灰色	緻密	堅緻	
78	17	須恵器	环身	口径 △ 12.9cm 器高 △ 3.5cm	内外面ともナデ 外) ヘラ切り	灰色	緻密	堅緻	
79	17	須恵器	环身	口径 △ 12.2cm 器高 △ 3.9cm	内外面ともナデ	青灰色	緻密	堅緻	
80	17	須恵器	环身	口径 △ 11.6cm 器高 △ 3.8cm	内外面ともナデ	灰色	緻密	堅緻	
81	17	須恵器	环身	口径 △ 11.3cm 器高 △ 3.6cm 底径 △ 8.1cm	内外面ともナデ 底部糸切り痕	灰褐色	緻密	堅緻	
82	17	須恵器	环身	口径 △ 10.5cm 器高 △ 3.8cm 底径 △ 7.8cm	内外面ともナデ 底部ヘラ切り後未調整	暗青灰色	緻密	良	
83	17	須恵器	环身	口径 △ 12.6cm 器高 △ 4.1cm	内外面とも風化	灰色	密	良	
84	17	須恵器	环身	口径 △ 13.0cm 器高 △ 4.2cm 底径 △ 8.4cm	内外面ともナデ	暗灰色	密	良	
85	17	須恵器	环身	口径 △ 13.0cm 器高 △ 4.1cm	内外面ともナデ	暗灰色	緻密	堅緻	

● 出土土器観察表 4 (※復元値、△残存値、○推定値)

遺物番号	図版番号	種類	器種	法量	調整・技法	色調	胎土	焼成	備考
86	17	須恵器	环身	口径 器高 △ 3.7cm	※15.8cm 内外面ともナデ	灰色	緻密	堅緻	
87	17	須恵器	环身	口径 器高 △ 4.8cm	※14.8cm 内外面ともナデ	暗灰褐色	緻密	堅緻	
88	18	須恵器	环身	口径 器高 底径 △ 4.5cm ※ 7.9cm	※13.4cm 内外面ともナデ	淡灰色	緻密	堅緻	
89	18	須恵器	环身	口径 器高 底径 △ 4.5cm ※ 7.5cm	※12.8cm 内外面ともナデ	青灰色	緻密	堅緻	
90	18	須恵器	环身	器高 底径 △ 2.7cm ※ 7.7cm	※7.7cm 内外面ともナデ	灰色	緻密	堅緻	
91	18	須恵器	环身	器高 底径 △ 2.4cm ※ 7.6cm	※7.6cm 内外面ともナデ	灰色	緻密	堅緻	
92	18	須恵器	环身	器高 底径 △ 1.9cm ※ 9.4cm	※9.4cm 内外面ともナデ 静止ナデ	灰色	緻密	堅緻	
93	18	須恵器	环身	器高 底径 △ 1.4cm ※ 8.6cm	※8.6cm 内外面ともナデ	灰色	緻密	良	
94	18	須恵器	环身	器高 底径 △ 3.1cm ※12.4cm	※12.4cm 内外面ともナデ 底部に剥片が落着	暗灰色	緻密	堅緻	
95	18	須恵器	环身	器高 底径 △ 1.5cm	※1.5cm 内外面ともナデ 底部にヘラ記号あり	灰色	緻密	堅緻	
96	18	須恵器	环身	器高 底径 △ 2.2cm ※ 7.8cm	※7.8cm 内外面ともナデ	淡灰色	緻密	堅緻	
97	18	須恵器	环身	器高 底径 △ 3.4cm ※ 7.8cm	※7.8cm 内外面ともナデ	暗灰色	緻密	堅緻	
98	18	須恵器	环身	器高 底径 △ 2.0cm ※10.8cm	※10.8cm 内外面ともナデ 底部糸切り	淡灰色	密	良	
99	18	須恵器	环身	口径 器高 底径 ※ 5.7cm △ 9.6cm	※15.1cm 内外面ともナデ 底部糸切り	青灰色	緻密	堅緻	
100	18	須恵器	环身	口径 器高 底径 ※ 4.2cm △ 8.0cm	※12.8cm ナデ後静止ナデ 底部糸切り	青灰色	緻密	堅緻	重ね焼きの痕跡あり
101	18	須恵器	环身	口径 器高 底径 △ 3.2cm ※ 9.3cm	※11.8cm ナデ後静止ナデ	青灰色	緻密	堅緻	
102	18	須恵器	环身	口径 器高 底径 △ 4.2cm ※ 7.8cm	※11.7cm ナデ後静止ナデ 底部糸切り	青灰色			重ね焼きの痕跡あり
103	18	須恵器	环身	口径 器高 底径 ※ 3.5cm △ 10.3cm	※14.7cm ナデ後静止ナデ 底部糸切り	灰色	緻密	堅緻	重ね焼きの痕跡あり
104	18	須恵器	环身	口径 器高 底径 △ 4.3cm ※ 8.8cm	※14.1cm ナデ後静止ナデ 底部糸切り	灰色	緻密	堅緻	重ね焼きの痕跡あり
105	19	須恵器	环身	器高 底径 △ 2.0cm ※ 8.7cm	※8.7cm 内外面ともナデ 底部にヘラ記号あり	外) 淡褐色 内) 灰褐色	緻密	堅緻	
106	19	須恵器	皿	口径 器高 底径 2.1cm ※ 9.6cm	※9.6cm 内外面ともナデ 底部糸切り	暗青灰色	緻密	堅緻	
107	19	須恵器	环蓋	口径 器高 △ 4.3cm	※10.8cm 内外面ともナデ	青灰色	緻密	堅緻	
108	19	須恵器	环蓋	口径 器高 △ 3.3cm	※11.6cm 内外面ともナデ	淡青灰色	密	良	
109	19	須恵器	环蓋	器高 摘み径 △ 2.4cm 2.6cm	※2.6cm 内外面ともナデ	灰色	緻密	堅緻	
110	19	須恵器	环蓋	器高 摘み径 △ 1.9cm 4.0cm	※4.0cm ナデ、ケズリ	淡灰色	緻密	堅緻	
111	19	須恵器	环蓋	器高 摘み径 △ 1.6cm 4.2cm	※4.2cm 内外面ともナデ	灰色	緻密	堅緻	

◎出土土器観察表 5 (※復元値、△残存値、○推定値)

遺物番号	図版番号	種類	器種	法量	調整・技法	色調	胎土	焼成	備考
112	19	須恵器	壺蓋	器高 △ 1.7cm 横み径 5.7cm	内外面ともナデ	青灰色	緻密	堅焼	
113	19	須恵器	壺蓋	器高 △ 2.4cm 横み径 6.6cm	内外面ともナデ	灰色	緻密	堅焼	
114	19	須恵器	壺蓋	口径 △ 11.8cm 器高 △ 1.9cm	内外面ともナデ	淡灰色	緻密	堅焼	
115	19	須恵器	壺蓋	口径 △ 14.4cm 器高 △ 2.0cm	内外面ともナデ	灰色	緻密	堅焼	
116	19	須恵器	壺蓋	口径 △ 13.0cm 器高 △ 1.9cm	内外面ともナデ	青灰色	緻密	堅焼	
117	19	須恵器	壺蓋	口径 △ 16.4cm 器高 △ 2.1cm	内外面ともナデ	灰色	緻密	堅焼	
118	19	須恵器	壺蓋	口径 △ 17.4cm 器高 △ 1.4cm	内外面ともナデ	灰色	緻密	堅焼	
119	19	須恵器	壺蓋	口径 △ 13.2cm 器高 △ 2.2cm	内外面ともナデ	暗灰色	緻密	堅焼	
120	19	須恵器	高环	口径 △ 16.4cm 器高 △ 9.0cm	内外面ともナデ	淡灰褐色	緻密	堅焼	
121	19	須恵器	高环	口径 △ 18.4cm 器高 △ 3.2cm	内外面ともナデ	暗灰色	緻密	堅焼	
122	19	須恵器	高环	器高 △ 4.6cm 底径 △ 13.7cm	内外面ともナデ	暗灰色	緻密	堅焼	
123	19	須恵器	高环	器高 △ 7.2cm	内外面ともナデ	灰褐色	密	堅焼	
124	19	須恵器	高环	器高 △ 8.9cm	内外面ともナデ	暗灰色	緻密	堅焼	
125	19	須恵器	高环	器高 △ 6.5cm 底径 △ 12.8cm	内外面ともナデ 透しあり	灰色	緻密	堅焼	
126	20	須恵器	高环	器高 △ 4.9cm 底径 △ 6.6cm	内外面ともナデ	青灰色	緻密	堅焼	
127	20	須恵器	高环	器高 △ 4.1cm 底径 △ 8.4cm	内外面ともナデ	外) 暗灰色 内) 灰色	緻密	堅焼	
128	20	須恵器	高环	器高 △ 5.1cm 底径 △ 7.6cm	内外面ともナデ 透し	暗灰色	緻密	堅焼	
129	20	須恵器	高环	器高 △ 1.9cm 底径 △ 10.8cm	内外面ともナデ	暗灰色	緻密	堅焼	
130	20	須恵器	壺	口径 △ 16.4cm 器高 △ 5.0cm	内) 当て具痕 口縁部ナデ	灰色	緻密	堅焼	
131	20	須恵器	壺	器高 △ 34.6cm 胴径 △ 29.4cm	外) 叩き、底部ナデ 内) 当て具痕	淡灰色	密	良	
132	20	須恵器	壺	器高 △ 1.38cm	外) 叩き後ハケ 内) 当て具痕	青灰色	緻密	堅焼	
133	20	須恵器	壺	口径 △ 13.7cm 器高 △ 5.6cm	内) 当て具痕 口縁部ナデ	青灰色	緻密	堅焼	
134	20	須恵器	壺	口径 △ 10.4cm 器高 △ 6.8cm	内外面ともナデ	暗灰色	緻密	堅焼	
135	20	須恵器	壺	器高 △ 6.8cm	内外面ともナデ	淡灰褐色	緻密	堅焼	
136	21	須恵器	壺	器高 △ 8.6cm	外) 叩き後ナデ	暗灰色	緻密	堅焼	
137	21	須恵器	壺	器高 △ 9.9cm	内) 当て具痕	暗灰色	緻密	堅焼	
138	21	須恵器	壺	器高 △ 25.3cm	外) 叩き後ナデ 内) 当て具痕	青灰色	緻密	良	
139	22	須恵器	壺	器高 △ 7.4cm 胴径 △ 15.9cm	内外面ともナデ	灰色	緻密	堅焼	
140	22	須恵器	壺	器高 △ 9.0cm 胴径 △ 18.8cm	内外面ともナデ	暗灰色	緻密	堅焼	
141	22	須恵器	壺	器高 △ 1.8cm	颈部に段をなす	青灰色	緻密	堅焼	
142	22	須恵器	壺	器高 △ 6.1cm	颈部に段をなす	灰色	緻密	堅焼	
143	22	須恵器	鉢	器高 △ 4.8cm	突帯貼りつけ	灰色	緻密	堅焼	
144	22	磁器	碗	口径 △ 12.0cm 器高 △ 3.5cm		淡白茶色 胎) 赤茶色	密	良好	陶胎染付
145	22	磁器	碗	器高 △ 1.8cm 底径 △ 5.1cm	高台部一部露胎 疊付に砂付着	白茶色 胎) 赤茶色	密	良好	陶胎染付

[図版1]



5区1トレーニチ全景（西より）



5区3トレーニチ完掘（南より）

[図版2]



5区5トレンチ完掘（南より）



5区5トレンチ、SI 01・02 完掘（南東より）

[図版3]



4区1トレンチ完掘（東より）



5区1トレンチSK 01・02（西より）



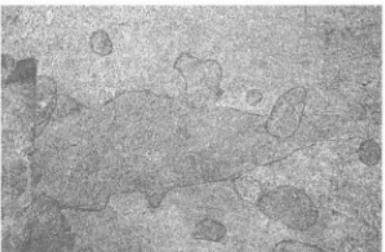
4区2トレンチ完掘（南より）



5区4トレンチ完掘（南より）



4区2トレンチSD 01完掘（北より）



5区3トレンチSD 02検出（東より）



5区1トレンチSK 01・02（北より）



5区3トレンチSD 02完掘（南より）

[図版 4]



5区3トレンチ SD 01 完掘（東より）



5区5トレンチ SD 501 土器7・8出土状況（北より）



5区5トレンチ溝状遺構完掘（西より）



5区5トレンチ 土器10・11出土状況（南より）



5区5トレンチピット検出（南より）



5区5トレンチ SI 01土器3出土状況（南より）



5区5トレンチ 土器131出土状況（東より）



5区5トレンチ SI 01 鉄器1出土状況（南より）

[図版5]



5区5トレンチ SI 01・02 断面（西より）



5区5トレンチ ピット群完掘（東より）



5区5トレンチ SI 01 鉄津埋納状況（西より）



5区5トレンチ SD 501 完掘（東より）



5区5トレンチ完掘（南より）



5区5トレンチ SD 502 完掘（南より）



5区5トレンチ完掘（北より）



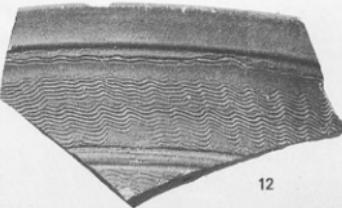
5区5トレンチ ピット群完掘（南より）

[図版 6]



3

SI 01 出土須恵器 (3)



12

P 81 出土須恵器 (12)



4

SI 01 出土須恵器 (4)



11

土器溜まり出土須恵器 (11)



5

SI 01 出土須恵器 (5)



須恵器 (11) 竹管拡大



F-2

SI 01 出土鉄滓 (F 2)



10

土器溜まり出土須恵器 (12)

[図版7]



SD 501 出土須恵器 (8)



SD 501 出土須恵器 (7)



遺構外出土弥生土器 (13)



その他の出土遺物

210.2
Yon
(33)
図書館

報告書抄録

ふりがな	いんだみやのたにいせき 4く・5く							
書名	陰田宮の谷遺跡4区・5区							
シリーズ名	(財)米子市教育文化事業団発掘調査報告書							
シリーズ番号	33							
編著者名	佐伯純也							
編集機関	財団法人 米子市教育文化事業団 埋蔵文化財調査室							
所在地	〒683-0822 鳥取県米子市中町20 TEL(0859)22-7209							
発行年月日	西暦 2000年 3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド	北 緯	東 經	調査期間	調査面積	調査原因	
いんだみやのたにいせき 4区・5区	市町村 陰田宮の谷 28-1 ほか	31202	724	35度 24分 50秒	133度 19分 48秒	19981102 ~ 19990604	1100m ²	道路建設
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項			
陰田宮の谷遺跡 4区・5区	集落跡	古墳時代 飛鳥時代 奈良時代 江戸時代	テラス状遺構2、 住居跡2、溝3、 ピット	弥生土器、土師器、須恵器、石鏡、 銅鏡、煙管、陶胎染付、鉄器、铁滓、 埴輪	住居床土から鐵滓埋 納遺構を検出			

(財)米子市教育文化事業団文化財発掘調査報告書33

陰田宮の谷遺跡4区・5区

2000年3月

編集・発行 / 財団法人 米子市教育文化事業団

〒683-0822 鳥取県米子市中町20

電話・FAX(0859)22-7209

印 刷 / (有) みどり印刷